
IS・DEN - O 《インフィニット・ストラトス・デンオウ》

蒼碧

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS・DEN・O
インフィニット・ストラトス・デンオウ

【コード】

N0906S

【作者名】

蒼碧

【あらすじ】

万年不幸な僕、織斑良太郎がある日拾った腕時計はISで、何故か僕だけしか動かすことが出来ない代物だった！？あれやこれやで話が進み、世界で初めてISを動かした兄、織斑一夏とIS学園に入る事になった僕を待ち受けていたのはとんでもない毎日だったんだ……。僕、大丈夫かなあ……。『何辛気くさい事言っつてんだ良太郎！俺は最初から最後までクライマックスなんだ……。！行くぜ行くぜ行くぜえ！』青空ソウを駆けて、俺、参上！

プロローグ・始まりはいつも突然（前書き）

どうも、やられてる感がありますが、頑張っていきたいです！

プロローグ・始まりはいつも突然

あの日、

『オーイ！大丈夫かあ！？そんな木の上に自転車で乗るなんてどうやったらそうなるんだ？』

『あはは・・・なるべく早く助けてください！』

どうしてだったのか、今だに分からない。

『はあ・・・今日は一段と何だか不幸だなあ・・・ってわあ！』

ガッシャーン！

『何してんだあ！お前！』

『ス、ス、ス、スミマセンツ！コレで許して下さい！』

『分かってんじゃねえか、って何でお前財布に名前書いてるんだ？』

『あ、いや、後でこれ捨てますよね・・・？こうしてると捨てた時に戻ってくる確率が高くなるから・・・。』

運命はどう転がって行くか、誰にも分からない、いや、分かることなんて出来ない。

『行こーぜお前ら！坊主！いつかまたな！』

『あはは………あ、空き缶。ゴミ箱は………あった。よっと!』

カーン!

『あ!』

『アア?』

『ひいつ!?!』

でも、アレを拾った時から。

『はあ………!はあ………!やっと………!逃げれた………!自転車………!取りに行かないと………!!………ん?何コレ………?腕時計?』

僕の運命は、

『見つけたぞ坊主!』

『わあっ!?!』

変わり始めたのかもしれない。

ガンツ!

『痛い!?!つてコレは!?!』

『え？こ、コレって……！IS！？』

「織斑良太郎君！」

「えっ！？」

突然の現実の声にガバツと身体を起こすと、そこには僕の兄、織斑一夏が苦笑いをし、その前の教壇に僕が今日から通う事になったこのIS学園の教師で僕のクラスの副担任、山田真耶先生が半涙目でこちらを見ていた。

「えつと……さつき、織斑君のお兄さんにも言っただけど……今、自己紹介なんだ。あの……自己紹介、してくれないかな？駄目かな？」

うるうると涙を溜めながら山田先生が聞いてくる。

「あ、えつとあの！（ガタタツ！ガンツ！）痛！？あ！えつと！織斑良太郎です。みんなと一年間、楽しく過ごせたらなって思います。兄の一夏共々、これからよろしくお願いします。」

山田先生の半涙目の言葉に促され、小指を机にぶつけながらも、どうにかこうにか自己紹介を終える僕。相変わらずこの不幸体質は治らないなあと思っていると、

『キヤアアアアアアアアアア！！！！』

『！！？』

周りの女の子達の大絶叫の大合唱炸裂。これに驚く一夏兄さんと僕。

それもそのはず、何しろ教壇前の2つの席に座る僕と一夏兄さんの男子二人以外、クラスメートは全員女子なのだ。更に色々と歓喜の聲が飛び交う。

「ちよつとドジな感じがあるけどつてもステキイイイイイイ！」

「それにウチのクラスに二人目の男よおおおおお！」

「そしてさりげなくお兄さんを気遣うなんて紳士的イイイイイイイ
！」

「しかも顔は可愛いイイイイイイ！」

「兄×弟……イケるわ！」

「ハア……ハア……！」

最後らへんの言葉が気になるが、僕は席に座りこちらを向いていた一夏兄さんと顔を見合わせ、同時に小さく呟いた。

『ど、どうしてこうなったんだろう……！』

女の子達の歓喜の嵐の中、その呟きは薄れていった。……この日から僕、織斑良太郎のIS学園での生活が始まったんだ……。

ブローグ・始まりはいつも突然（後書き）

いかがでしたか？出来れば感想よろしくお願いしますね。

第一話「僕、入学!？」

「ISと言うのは……」

一時間目の授業が始まり、山田先生がISの解説をしている中、僕は授業の内容をまとめながら、ある事を考えていた。

(……大体なんで、今までずっと男性には扱えないって言われてたISが、今になって僕と一夏兄さんの兄弟二人が使えるって事が分かったんだろ？束姉さんがISを開発して以来、ずっと女性だけにしか扱えないって言われてたのに。)

ISの開発者、篠ノ之束姉さんの何か企んでそうで企んでそうになり顔が一瞬浮かぶ。

(……それにあのIS。)

僕は思い出す、あの時道で拾って不良に絡まれた時に発動したあのISを。

(あのIS……一体誰が作ったんだ……?とかあの後不良が逃げ出して人を呼んで来る間に勝手に起動終了をして腕時計に戻って僕の腕から外れなくなっちゃったんだけど……どうして何だろう?)

そんな事を考えていると、

「この馬鹿者!」

パンツ！

「つてえ！？」

「え？」

考え事を止め、顔を上げると僕の兄、織斑一夏が痛そうに頭を抱え、その脇に黒髪でスーツを着た美人が出席簿片手に立っていた。一夏兄さんは顔を美人の方に向けて声を荒げる。

「千冬姉！何すん「スパパンツ！」つてえ！？」

「ここでは織斑先生と呼べ……………！」

「ス、スミマセンデシタ……………」

黒髪でスーツを着た美人……………僕の姉にしてES学園の教師である織斑千冬姉さんの気迫の前に、一夏兄さんはタジタジになる。

「全く……………で、教本を所持していないとはどういう事だ？」

「え、え……………古い電話帳と間違えて捨てた「スパパンツ！」「ふがらっ！？」」

再び容赦なく千冬姉さんの出席簿アタックが与えられ、またもや頭を押さえ悶える一夏兄さん……………仕方ない、助けないと……………。

「お、織斑先生。」

「何だ織斑弟。」

「僕の教本を一夏兄さんに貸すので今日の所は勘弁してあげてくださいませんか？」

「……織斑弟、ならばお前がその教本にあるISの基本事項を説明しろ。出来れば許してやる。」

「ふええっ!？」

「どうした?やらないのなら兄弟仲良くグラウンド十周だぞ?」

「え、えつと!IS、インフィニット・ストラトスは元々宇宙空間での活動用に開発されていたマルチフォームスーツが発展して、現在の形になりました。でもISは現行のどの兵器も凌駕した力を持っていたので、今は世界でその軍事転用を禁止してもつぱらパワードスーツスポーツとして、ISを使っています。……どうでしょうか?」

ビクビクしながら織斑先生に尋ねる僕。織斑先生は、

「……まあいいだろう。織斑兄、お前も許してやる。後で教本を配布するからそれをすぐに暗記しろ。」

「は、はい……。」

(ふあゝ!なんとか切り抜けれたあゝ!千冬姉さんいきなり過ぎだよ〜!)

パシンッ!

「織斑先生と呼べ。」

(何で分かるのさあ〜!?)

織斑先生の出席簿アタックが僕の頭に炸裂。読心術でも知ってるの〜!?!?と思いつつも、そんなこんなで一時間目は終わり、休み時間になると一夏兄さんがこちらを向き、話しかけてきた。

「良太郎、悪かったな教本。」

「いいよ一夏兄さん。でも、兄さんなんだって捨てたり……。」

「いやあ……面倒臭くってその辺に置いてたら間違えて捨ててた。」

「面倒臭いからって……一夏兄さん、ダメでしょそれ。」

「ははは!……わりい。」

「……いいよ、もう慣れてるし。」

ここで一瞬話は途切れ、次の瞬間同時にアハハハハハ!と笑う僕と一夏兄さん。そうしていると一夏兄さんの前に長い黒髪をポニーテールにした鋭い目をした女の子が立ち、一夏兄さんに話しかけた。

「……ちよつといいか。」

「え?」

「あれ？ 篤さん？」

その女の子は何を隠そう、僕達兄弟の幼なじみである篠ノ之篤さんであった。

「何だよ？」

「……少し話がある、屋上へ来い。」

「分かった。良太郎、少し行ってくる。」

「うん、分かった。後でね一夏兄さん。」

そう言つて一夏兄さんと篤さんは教室を出て行つた。さて、次の授業の準備をしようかと思つていた時、少し尿意を感じトイレに行く事にした。

しかし、

「はあ……はあ……！ 教室から……！ トイレまで……
・！ 遠いよ……！」

IS学園には基本的に女子のみだ。というか今までそれが当たり前であつたせいか、男子用のトイレがあまりないのだ。なので僕は職員用トイレがある棟まで急ぐのだが……僕は体力が絶望的に無い。オマケに……

「うわっ！ わわわっ！？」

ドスンッ！ゴロゴロゴロッ！ガッシャーンッ！

「・・・・・・・・痛い。」

僕は万年不幸体質の持ち主だ。今回も何も無いところで盛大にすっころび、壁にぶつかってしまった。と、そこでぶつかつた壁の近くに何か変な物が埋まっているのにふと気が付いた。それはやけにメカメカしいウサミミであり、その横の立て看板には【抜いちゃって】と、ペンキで書かれていた。・・・・・・・・・・が、

「・・・・・・・・行こう。」

そのままスルーして教室へと足を向けたのだった。

・・・・・・・・・・

「・・・・・・・・織斑弟、一応理由を聞こうか？」

「トイレに行って帰ってくる途中で十回ぐらいコケてしまいました・・・・・・・・。」

その後僕は教室に帰る途中、十回程コケにコケまくり、二時間目が始まって五分後にようやく教室へたどり着くことが出来たのだった。

「・・・・・・・・分かった、とりあえず席につけ。」

「はい・・・・・・・・。」

千冬姉さ、織斑先生は小さく溜め息を吐くと、僕にそう促した。その後は順調に時間が経ち、二時間目は終わった。終わると同時に一夏兄さんはこちらを向き、話しかける。

「良太郎、十回コケたって大丈夫なのか？」

「うん、まあ……。いいかげんこの不幸体質にも慣れてるし。」

「いやいや、慣れたらダメだろ慣れたら。」

「あはは……。でも慣れちゃってるんだよね……。はあ。」

そんな感じで話していると、横から声がした。

「ちょっとよろしいかしら？」

「は？」

「え？」

僕と一夏兄さんが声がした方を向くと、そこには金髪のロングで毛先がロールな外人さんがいた。……。そっか、そっか、そっか、国際校みたいなものだったねISの。その外人さん、というか先ほどの自己紹介で結構大きな声で話してた……。セシリア・オルコットさんだったけ？オルコットさんは怪訝そうな顔を浮かべると、こちらに向かつてこう言う。

「まあ！？何ですの、そのお返事は！？私に話しかけられる事だけでも光栄なのでそれからそれ相応の態度というものがあるのではない

のですか？」

「んな事言われても俺、お前の名前知らないし……なあ良太郎。」

「一夏兄さん、それは兄さんが自己紹介の時寝てたから聞いてないだけでしょうが。……確かセシリア・オルコットさんでしたっけ？何か僕達に用が？」

「まあっ！？……お一人の方はまだいいとしてあなた！この私を知らないのですか！？」

「……知らねえ。」

一夏兄さんの返答にオルコットさんは全身をワナワナと震わせながらも答える。

「イギリス代表候補生、セシリア・オルコットですわ……！」

「……なあ、一つ質問いいか？」

「ハン、下々の者の要求に答えるのも貴族の務めですわ。よろしくてよ。」

いくらか落ち着きを取り戻してきたオルコットさんが優雅に髪を払いながら返す。一夏兄さんは少しおいて答えた。

「……代表候補生って、何？」

ドンガラガッシャーン！

その言葉に僕と周りで聞き耳を立てていた女の子達はズッコケた。オルコットさんはなんとか押しとどまり、僕は起き上がりながら兄さんに説明する。

「い、一夏兄さん。代表候補生というのはね、各国のIS操縦者の候補者から選出された人達の事だよ。国や企業がスポンサーになってくれたり、その国の代表選抜に参加出来たりするんだ。」

「そいつは凄いな……。」

一夏兄さんの呟きに「ご満悦でもしたのか、オルコットさんは意気も高々に話す。

「そう！限られた、一握りのエリートですわ！」

と、ここに

【キーンコーンカーンコーン。】

予鈴がなり、オルコットさんは

「お話はまたの機会に……。」

と言い、自身の席へ戻っていった。

……

三時間目、織斑先生がクラス代表戦に出場するクラス代表を決めるとの事で、現在クラスは……。

「はい！織斑君を推薦します！」

という一夏兄さん派と、

「じゃあ私、織斑君の弟君を推薦します！」

なぜか僕派が争いあっていた。そこへ織斑先生が「他にいないのなら織斑兄と織斑弟の2人で決めるぞ」と言うので、止めに入ろうとしていると、ここでいきなり後ろ斜め側の席にいるオルコットさんがバアンツ！と机を叩きつけながら言い放った。

「納得がいきませんわ！」

オルコットさんは勢いよく席から立ち上がり、続ける。

「そのような選出は認められませんわ！それに、男がクラス代表なんていい恥曝しですわ！」

(……女尊男卑っていき過ぎるところなるんだね。)

ISは女性しか乗れない。その事実は今までの男女の力関係を大きく変えてしまった。その結果生まれたのが、“女尊男卑”の考えだ。オルコットさんは、まさにその典型的、ステレオタイプなそれだった。

「この様な屈辱をこのセシリア・オルコットに一年間味わえとおっしゃるのですか！？大体、文化としても後進的な国で過ごさなければ

ばいけない事自体、絶えられない苦痛ですわ!!」

そんなこんな言っていると、一夏兄さんが反論をする。

「イギリスにも大した国の自慢なんて無かつただろ？不味い料理ぐらいが取り得で、あとは無駄に高いプライドか？」

「ちょっと！一夏兄さん！？確かにそれはあるかもしれないけど流石に相手の前では止めようよ!!」

僕としてはフォローのつもりだったが、オルコットさんは僕の言葉が気に障ったのか、

「あ、あ、あ、貴方達！我が祖国を侮辱しましたわね!？」

「へえっ!？僕も!？」

僕と一夏兄さんにキレてしまった。だが、負けじと一夏兄さんが反論する。

「最初に日本を馬鹿にしたのはお前だろ？馬鹿にされたくないけりや馬鹿にしなきゃいいじゃねえか。」

オルコットさんはプルプル身体を震わせながら、一夏兄さんの言葉を聞いていたが、やがてキツ！と僕と一夏兄さんを睨んで指差しながら高らかに宣言した。

「決闘ですわ!!」

「へ?」「へ?」

「貴方達二人に決闘を申し込みますわ！」

「ち、ちよつと待って！僕は……』いいぜ、四の五の言うよりよっぽど解りやすいしな。なあ良太郎。』一夏兄さん!？」

僕は断ろうとするも、一夏兄さんが勝手に了承してしまう。

「もし貴方達が負けたら貴方達を私の小間使い、いや、奴隷にして差し上げますわ！」

「ちよつと待って！」

「なんですの？」

オルコットさんは不機嫌そうな顔で聞き返す。

「一夏兄さんは仕方ないとしてなんで僕が？」

「あら？やる前から弱気発言ですの？まあ貴方の兄よりは私との実力を分かっているだけ馬鹿ではないようですが……。」

ドクン……!

その時、僕の中で何かが動き始めた感じがした。

「『馬鹿?』」

(あ、あれ?何だ……!?)

ドクン……ドクン……!

「そう！男の分際でイギリス代表候補生である私に喧嘩を売るなど愚の骨頂、馬鹿としか言いようがありません……わ……!?あ、貴方!?その髪型!?!」

「『馬鹿だとお!?!』」

(身体と声が……!勝手に!?)

「『上等だあつ!ぜってーぶつ倒してやるよ!言つとくが俺は最初から最後までクライマックスなんだ……!途中で泣き言は聞かねえぞおつ!』……あ、あれ?い、今の?」

僕がさつきまでの事に混乱していると、黙ったままでいた織斑先生が話した。

「よしまとまったな。では一週間後、アリーナで試合を開始する。各自、しっかり準備をするように。」

「……え?ええ……?!?!?!」

何が起こったか解らぬまま、僕と一夏兄さん対オルコットさんの試合が決まってしまったのだった……。

第一話「僕、入学!?」（後書き）

『次回、IS・DEN・O 《インフィニット・ストラトス・デン
オウ》!』

「やつほー!みんなのアイドル、篠ノ之東さんだよ」

「一人部屋か……『うわあっ!?!』「ボタンッ!」……
どうしたのー夏兄さん?」

「とりあえず……やることだけはわかったかも。」

「変身!」

次回、「ライド・オン・ウインド」

青空そらを駆けて俺、参上!

第二話「ライド・オン・ウィンド」(前書き)

一気にPV5・0000を超えたと……!?!?!ありがとうございます!

第二話「ライド・オン・ウインド」

「……なんだっただろ、あれ……。」

さっきの事を思い出しながら呆然と呟く僕。あの後、一夏兄さんに保健室に連れて行かれたが、特に異常は無かつたらしい。

そして放課後になり、篤さんが特訓だと言って一夏兄さんの襟首を掴み連れて行くのを見送った後、僕は先ほどの立て看板&メカメカしいウサミミの前に来ていた。

よく見ると立て看板の上に貼り紙があつて、【放課後まで放置プレイなんてりょーくんも大人になつたねえ〜（泣）】と書かれていた。

「……………」

色々言いたい事はあるが、とりあえず無言でウサミミを抜いてみたとすると空から巨大なニンジンみたいなのが、

『『やあ〜〜〜ほお〜〜〜！』』

ドカアアアアーン！

声と一緒に落ちてきた。が、

ガンツ！

「やあやありょーくん！久しぶりだねえ〜！みんなのアイドル 篠ノ之束さんだよ〜 ……ってあれ？りょーくん？りょーくん大丈夫！？」

・・・・・・・・・・・・・・・・

「ん・・・・・・・・！」

「あ、気がついた？」

目が覚めるとそこには十年前にISを開発した張本人、篠ノ之束姉さんその人の顔があった。

「・・・・・・・・・・。」

「あれれー？りょーくんご機嫌斜め？何だかちーちゃんに反応似てきてるよ。」

「ご機嫌斜めも何も、さっきの束姉さんの着地の時にコンクリートが飛んで頭に当たったんだから・・・・・・・・。」

僕がそう言つと束姉さんはいきなり笑い飛ばす。

「なはは〜 相変わらずの不幸っぷりだね〜 ホントにどうしてここまで不幸なのかこの天才の束姉さんの頭脳を持ってしてもわからないしね〜 ・・・後一応ゴメンね」

「・・・・・・・・スッゴク軽く言っね・・・・・・・・。というか束姉さんこの格好。」

「うっ？？どうしたの？」

現在、俗に言う膝枕状態プラス上から顔を覗きこまれていた。

「……………はあ、まあいいや……………。(ムクリ)」

「おとど。」

身体を起こして立ち上がり、正面に向き直って質問をする。

「で、束姉さん何の用があつて来たの？現在行方不明なはずな束姉さんが。」

「うん、そつだね……………キミの腕の腕時計のことかな？」

少し声のトーンを抑えて束姉さんが言う。

「……………これ、束姉さんが作ったの？」

僕は右腕に付いている腕時計を束姉さんに見せながら言う。しかし束姉さんは首を横に振りながら答える。

「いやいや、束さんはこういうの作った覚えは無いんだけどね……………でも、少し面白いことはわかったかも……………！」

「面白い、こと？」

僕は束姉さんに聞き返す。束姉さんは頷いて話し始める。

「この子を起動するには特殊なボイスコードが必要みたいだね……………！」

「ボイスコード……………？」

「多分このISを最初に起動した時は緊急時だったから特殊なボイ

スコードを言わなくても良かったんだと思うよ。でも！これから
はボイスコードでしか起動しないんじゃないかな？」

「はぁ……。で、束姉さんその起動コードって？」

「うん、それはね『織斑良太郎君』……。どうやら時間のよ
うだね」

「ってええ!？」

「ではではりょーくん！お大事にまた会う日まで」

「え!？ちよつと束姉さん!？」

そう言つて束姉さんはそのままダダダー！と駆け去ってしまった
のだった。

「ちよつ!？……。行つちやつたよ……。」

「ああ！いたいた！織斑君!？」

「え？山田先生?」

呆気にとられていた僕を呼んだのは山田先生だった。山田先生は走
りながらこちらに近付いてきていた。そして僕の前に来ると大きく
息をつく。

「はう……。!やつと見つけられました……。!」

「や、山田先生?大丈夫ですか?」

「はあ……。僕は大丈夫ですけど……。一夏兄さんには？」

「織斑先生が伝えてるはずですよ。後、これが織斑君の部屋の番号だそうです。荷物も織斑先生がもう持ってきてあるそうですよ。」

「そうですか。わざわざありがとうございました、山田先生。」

僕はニコツと笑って山田先生にお礼を言う。すると山田先生は再び顔を真っ赤にしてから小声で呟いた。

「は、はう……。！／／／／／／そ、その笑顔反則ですよ……
・！／／／／／／／／」

「?どうかしましたか山田先生？」

「ふえっ!?!いいいや!な、何でもありませんよ!ありませんっ
!／／／／／／／／」

「は、はあ……。ん?」

「え?どうかしま……。し……。た!?!ニ、ニンジンが空を!
」?」

僕と山田先生が見上げた先にあっただのは、空を飛んで行くニンジンらしき物体X。

(……。東姉さん……。もう少し静かに帰ろうよ……。!)

アワアワと慌てる山田先生の隣で、僕は心の中でぞっと呟くのであった。

.....

「えつと.....1026号室.....ここか.....」

あの後山田先生と別れた僕は、学生寮のあてがわれた部屋の前に来ていた。僕は別れ際山田先生から渡された鍵を使い、部屋の中に入った。

ガチャ、

「失礼します.....つて広いなあ.....ここを一人部屋か.....」

部屋は元々二人用であったのか、ベッドが2つあって、荷物が手前側の方に置いてあった。

「えつと.....とりあえず生活に必要な物は全部あるし.....あ、ちゃんと豆とコーヒーマーカーもある。」

とりあえずコーヒを淹れ、出来たコーヒを口に含み、ほっと一息つく僕。そうしていると、

「おわあああああつ!?」「ボタンッ!」「ふう.....!助かつ」「ザンッ!」「わっ!」「ザンッ!」「わっ!」「ザンッ!」「おわあつ!」
「?」

「ん？」

隣の部屋から慌てて誰かが出て行き、何か鋭利な物で何かを突き刺す音が聞こえてきた。……つて一夏兄さん？

ガチャ、

「……どうしたの一夏兄さん？」

「あ、良太郎……！あはは……箒に追い出された。」

部屋を出ると何故かたくさんの子の集まりの真ん中に一夏兄さんが座り込んでいた。

「なるほど、箒さんと同室なんだ一夏兄さん。……とりあえず一夏兄さんは箒さんを説得した方がいいんじゃない？」

「分かった！おーい！箒！いや、箒さん！お願いします！入れて下さい！頼みますー！」

……

「はい、さっさと。」

『ど、ど、ど……』

その後、何とか一夏兄さんは入れてもらい、僕は遅れて二人の部屋

に入ってきたが、何故か入っていった時、一夏兄さんは箒さんの木刀を真剣白羽取りしていた。で、とりあえず落ち着かせてからタンブラーに入れて自身の部屋から持ってきたコーヒーを二人に渡したのだった。

「ゴクッ。」うん！やっぱり良太郎のコーヒーは旨いな！」

「本当に美味しいものだな……！しかし一瞬見間違えたぞ良太郎……。本当に大きくなったのだなあ……！」

「あはは……。箒さんは逆に同じ髪型だったし、すぐわかりましたよ。」

箒さんとは千冬姉さんと一夏兄さんが通っていた剣道場で会った仲で、いつもの不幸や、イジメから一夏兄さんと一緒に救って貰ったものだ。それから少し昔話をして盛り上がった。その後僕は部屋に戻りシャワーを浴びてベッドについた。

(……何だか色々あった一日だったなあ……。そう言えば……束姉さんから結局聞けなかった起動コード……。どんなの何だろう……。?)

色々と考えていたが、疲れが勝ったのか、僕の意識は薄れていった……。

……

「一週間って……意外に早いんだね……。」

と、いうワケであつという間に一週間は過ぎ去り、僕がいるのはアリーナ、僕と一夏兄さん対オルコットさんの試合が行われる場所だ。ちなみに僕この一週間、様々な言葉を試していたのだが、腕時計・・・僕のISは全く動いてくれなかった。どうしようかな・・・と考えていると、隣にいる織斑先生が口を開いた。

「全く・・・！織斑兄は何をしている・・・！！」

「あはは・・・。」

「まあまあ織斑先生！篠ノ之さんと一緒だったはずですし、もうすぐ来ますよ！」

そう、一夏兄さんがまだ来ていないのだ。

（一夏兄さん一人ならまだしも、篝さんとならそんなにかからないはずだけどなあ・・・あ、もしかして？）

「とりあえず今日も一夏兄さんと篝さんは朝から最後の調整だとか言つて剣道場行つてたはずだけど・・・。」おゝいつ！』来たみたいだね・・・。」

一夏兄さんと篝さんが息を荒くして到着した。

「お、遅くなった千冬姉「スパンツ！」ぎゃひい！？」

「織斑先生だ、いい加減学習しろ。お前もだ篠ノ之。なぜ遅れた。」

「す、すみません先生。つい熱が入り過ぎてしまつて・・・。」

「全く……！！」

そう言いながら頭を押さえる織斑先生。

「と、とにかく早く準備をしましょう！」

山田先生がそう言い、僕達はアリーナの中のピットへと向かった。

……

「これが織斑君の専用IS、【白式】です！」

『おお~~~~！』

ピットに入った僕達を待っていたのは、一夏兄さんのために作られたという白銀のISだった。

「これが……白式……！最初にISに触った時と全然違う！……判る……！コイツが何のために作られたのか……！」

一夏兄さんが白式に触れ、感嘆の言葉を述べる。そんな一夏兄さんに、織斑先生が早く装着するように促し、一夏兄さんは白式の装着を始めた。と、ここで篤さんが僕に質問をする。

「ところで良太郎、お前のISはどうするんだ？」

「あ、うん……一応これはあるんだけど……。」

そう言っつて腕時計を見せる僕。

「どうしても動かなかったから……今回は今日までの練習で使つてた打鉄で良いかなくて……『織斑弟。』織斑先生？」

突然の声に振りかえると、後ろにいた織斑先生がこちらに近づき僕の手にある書類を渡してきた。

「これって……束姉さんから!？」

「白式の搬送コンテナの内側に付けられていたそうだ。……これで、使えるだろう?」

織斑先生の言葉に僕は静かに頷き、呟いた。

「とりあえず……やることだけは、わかったかも……!」

そして僕は紙に書かれていた言葉を唱えた。

『変身!』

瞬間、周りに光が現れ僕の周りを囲むと、やがて光は僕に近付いていき一つのISの形を形づくった。

黒いタイツのような下のスーツの上に、銀と白を基調とし胸や腕に走る電車のレールのようなアーマーを軸に取り付けられた細身の装甲に、電車のレールが三方向へと分かれたヘッドギアを装着して、

先ほどまで着けていた腕時計をそのまま大きくしたようなベルトを着けた姿へと、僕は文字通り“変身”した。

「こ、これが……！」

「良太郎の……IS！」

【DEN・O 《デンオウ》】

「デン……オウ……か……。」

一夏兄さんと篤さんが驚きを露わにする中、前方のモニターに表示された名称を僕は小さく呟いた。

（これが……僕のIS……デンオウ！）

腕のマニピレーターを動かし、拳を握って感触を確かめた。そうしていると、織斑先生達が声をかけてきた。

「よし、二人ともこれでISの準備は出来たな。では行って来い！もうオルコットは待っているぞ。」

「お二人とも、頑張ってくださいね！」

「一夏、良太郎！頑張るのだぞ！」

、僕と一夏兄さんは顔を見合わせて頷き、声を篤さんと織斑先生、山田先生に返した。

「はい、織斑先生、山田先生、篤さん！」

「勝つて来るさ！ 箒！ 千冬姉！」

そして僕達はカタパルトに乗り、空へと駆け上がったのだった。

第二話「ライド・オン・ウインド」(後書き)

次回、IS・DEN・O 《インフィニット・ストラトス・デンオ
ウ》！

「来ましたわね……！」

「武器！？武器はく！無いのおっ！？」

『俺に変われ！』

「まさか……！ファーストシフト！？」

「『俺、ようやく参上！』」

次回、「アラワレロー・モモタロー」

青空そらを駆けて、俺、参上！

第三話「アラワレロー・モモタロー」(前書き)

うーむ……なんかグダグダになっちゃったなあ……。

第三話「アラワレロー・モモタロー」

「……来ましたわね……！」

「待たせたな……！」

「こちらは準備出来ましたよ。」

青空^{そら}へ上がった僕らを待ち構えていたオルコットさんは、青空に溶け込みそうな蒼い機体を纏っていた。

【機体名称：ブルーティアーズ】

「ブルーティアーズ……。狙撃タイプなんだ……。！」

目の前に映し出されるオルコットさんの機体名称を呟く僕。そうしている、オルコットさんが口を開く。

「余りに遅いので逃げたのかと心配しましたわ……。まあ、あなたがたの逃げずに来た蛮勇だけは敬意を払いますわ。」

「そいつは悪かったな、ちょっと良太郎とコーヒーブレイクしてたんだ。」

「一夏兄さん……。。(ハア……。！また悪い癖だよ……。)

オルコットさんの挑発に、一夏兄さんが挑発で返した。そしてオルコットさんはその挑発にまだまだ余裕の表情で挑発し返す。

「あら、レディーとの約束に遅れるなんて、紳士の風上にも置けませんわね。」

「そつちこそ、男を待てるぐらいの優雅さと包容力をイギリスにでも落としてきたのかよ？」

自信たっぷりなオルコットさんの挑発を一夏兄さんが挑発し返し、オルコットさんはこれ以上は無駄かと思つたのか、舌打ちをしながらこちらに言つ。

「っ！……まあいいですわ……！舌論は辛うじて合格ですわ……！次はその口に似合うだけの力、見せてもらいますわ！」

「上等だよ！日本男子の実力、見せてやるっ！」

そうして一夏兄さんは身構える。オルコットさんも臨戦態勢に入るのだが、僕だけは少し質問があり、オルコットさんに聞いてみたのだつた。

「あ、あの〜オルコットさん？」

「良太郎？」

「……なんですか？」

臨戦態勢に入っていた二人から睨まれる僕。少し怖かったが、オルコットさんに質問を続けた。

「あ、あの。本当に僕達は二人掛かりで勝負していいの？」

僕の質問にオルコットさんは何だという顔をして答えた。

「何だそんなことですか？構いませんわ！あなたがたが束になっても敵わない、圧倒的な実力の差を見せて差し上げますわ！」

「いや、そういうのじゃなくって……『あいつ……！行くぜ良太郎！俺達の手、見せてやろうぜ！』兄さん！？」

僕は二人掛かりは流石にヤバいと思ったので言っただつもりだったが、一夏兄さんにはオルコットさんの言葉でさらに火に油を注いでしまうという事態になってしまった。と、ここで

『それではこれよりセシリア・オルコット対織斑一夏・織斑良太郎のクラス代表決定戦を始めます！』

アナウンスが流れ、僕も臨戦態勢をとり、全員にピリピリと張り詰めた雰囲気があった。そしてアナウンスが合図を告げ、

『それでは……始め！』

「「「っ！」「」」

僕達は一斉に動き始めた……。

……

『始め！』

『さあ、踊りなさい！私セシリア・オルコットとブルーティアーズの奏でる円舞曲で！』

『くっ！』

『わっ！』

「一夏！良太郎！」

試合が始まるとオルコットは手にしたスナイパーライフルを構え、一夏と良太郎を狙撃し始めた。二人は別々の方向へ移動して何とか初撃をかわすが、移動した先を読まれていたのか、それぞれ次の攻撃を当てられてしまう。

『ちつくしよっ！このおっ！』

『一夏兄さん！うわっ！』

「くっ……！」

（一夏……！良太郎……！頑張れ……！）

私はただ二人の健闘を祈っていた。

……

「くそっ！武器は……刀！？これだけかよ！？とにかく来い！」

オルコットさんの手に握られたスナイパーライフル、スターライトmk?から放たれる青いビームを何とかかわしていく僕達だったが、流石に攻撃されるだけじゃ勝てないと思い一夏兄さんは装備である刀を呼び出した。

「はああああああつ！」

「くっ！」

一夏兄さんはオルコットさんのビームを避けながら高速で接近し斬りかかるが、オルコットさんはよけてスターライトmk?からビームを放つ。

「一夏兄さん！僕も武器を……！武器！武器は……！つてええっ！？無いのお！？」

「……なあつ！？」

僕はウィンドウに装備一覧を呼び出したのだが、全くこれといった武器がなかったのだった。

「なっ！ウソだろ良太郎！？」

「ウソと思いたいけど全く無いんだ！」

「なっ！？あなた！丸腰で私と戦っていたというのですか！？」

僕の衝撃の発言に一夏兄さんとオルコットさんの攻撃の手が止まる。

「うん、そうなんだ……。」

「……あなた正気ですよ!? そのような行為、愚か者のする事ですわ!」

オルコットさんは頭を押さえて言う。

「そんな事言われても起動出来たの今日が初めてだし……オイ
その青角女! お前さっきなんて言った!?」……ってアレ
また!?」

「「「!?」「」」

僕がオルコットさんへ返答していると、またいきなりあの教室の時に聞いた声が響いた。

『だからその青角女! なんて言ったんだって言ってんだよ!!』

「あ、青角女!? ああああなた一体どこから!?!」

『いるじゃねえか目の前によ!』

「目の前……!?!」

オルコットさんの視線の先にあるのは……僕……僕う!?!

「あああなた! 何をおっしゃっているの!?!」

「ええっ!?! ち、違いますよお!」

指を僕にビツ！と指差して英国人らしからぬ風に叫ぶオルコットさん。僕が慌てているとまた声が響く。

『あゝあゝ！何で気付かねえんだよ近くに居んのによお！』

「近く？・・・何度聞いても良太郎から聞こえてんだが・・・？」

『だからここだって言ってるだろうが！大体身体につけててわかんねえのか！』

(身体・・・!?)

その時、僕は気付いた。

「キミ・・・まさかデンオウ・・・？」

『正解っ！ようやく気付いたか！』

「なっ!?!」

「ええっ!?!」

「「「「ええ~~~~~!?!」」」」

デンオウが喋った事に、アリーナにいた全員が驚きの声を上げた。そんなことにお構いなしでデンオウはオルコットさんに話しかける。

『それで青角女！お前さっきなんて言った？』

「ええっ！？え、え〜っとお、愚か者だと……。」

『それだそれ！前から散々バカバカ言いやがって……！いい加減にしるよ！オイ俺を装着してるお前！』

「えっ！ぼ、僕！？な、何！？」

いきなり話しかけられ、ビクつく僕。

『俺と変われ！』

「……へ？」

いきなりの謎発言に、僕はポカーンとなってしまうた。

『だから俺と変われ！あの偉そうでムカつく青角女をぶっ倒してやるんだよ！』

「っ！」「ピクッ！」「」

「いやいやいやいや！ちょっと待ってよ！何でそんな事になるの！？」

『ムカつくじゃねえか！散々威張り散らしやがってよお！』

「……！」「ピクピクッ！」「」

「だから確かにそういうのはあったかもしれないけど！本人の目の前で言うのは止めなよ！」「」

「・・・・・・・・・・・・・・・・っ!」ピクッ!ピクピクッ!」

『んだと!?!』

そんな風に言い争っているときなり僕の横を青い二筋のビームが駆け巡った。

「『・・・・・・・・ふえっ?』」

「あなたがた・・・・・・・・!」

「『!?!』」

強烈な寒気と言葉に振り返るとオルコットさんが鬼の形相でいて、その周りに四つの空に浮く角のような物が浮かんでいた。

「オルコット・・・・・・・・さん!?!」

「さつきから聞いていれば侮辱の言葉ばかり・・・・・・・・!もう堪忍なりませんわ!全力で!二人まとめて倒して差し上げますっ!」

そう言ってオルコットさんは周りの角のような物からビームを僕と一夏兄さんに向けて全方位から撃ってきた。

「うわっ!わっ!?!」

「良太郎!ぐっ!」

全方位からのビームに、僕達のシールドエネルギーがどんどん削ら

れていく。

「さあ！もつと踊りなさい！踊り疲れる程に！」

「こいつっ！このおっ！」

一夏兄さんは何とかビームをかわしていき、角の一つを手にした刀で切り裂いた。

「よっっ！」

「くっ！でもまだまだありましてよ！」

ここで僕はあることに気付いた。

(あの角が動いてる時……オルコットさんは動けない……？)

《一夏兄さん！》

僕は一夏兄さんにプライベートチャンネルを繋げた。

《良太郎？どうしたんだ！？》

《推測だけど……あの角みたいなのが出てる間って、オルコットさんは攻撃出来ないんじゃない？》

《なんだって？……あっ！……確かにそうかもしれないな……！》

一夏兄さんはブルーティアーズの攻撃を避けながら驚きを露わにする。

《僕がオルコットさんに接近するから一夏兄さんはそのうちにあの角みたいなのを全部斬ってしまつて!》

《でも良太郎!お前シールドエネルギーは!?!》

《大丈夫、まだ400位はぐつ!》

「良太郎!」

放たれた青いビームが当たった僕を一夏兄さんは心配するが、僕はプライベートチャンネルで兄さんに催促をかけた。

《早く!一夏兄さん!》

「コッチだあつ!」

「なつ!?!ブルーティアーズ!」

そして僕は一瞬のスキをつけてオルコットさんに近付く。オルコットさんは残りの角に指示して僕を狙わせるが、

「今だよ兄さん!」

「わかつた!おおおおおおおおおつ!」

一夏兄さんが僕の後ろに迫る角達に肉薄し、一気に斬り裂いた。

「やった！これでオルコットさんの武器は一つだけに……」
掛かりましたわね！」えっ!?!」

「なっ!?!」

やったかと思っていた僕達が振り返るとオルコットさんは不適に笑いながらこう言った。

「ブルーティアーズは4機だけでは……ありませんわ!」

そう言った瞬間、ブルーティアーズの後ろ側が持ち上がりそこから何かが発射された。

「くっ!」

僕達はそれぞれ避けるが、その何かは進む方向を曲げてこちらを追ってきた。

「なっ!?!」

「にいつ!?!」

(っ、追尾ミサイル!?!)

一夏兄さんと僕は必死に逃げるが、目の前に青いビームが撃たれ僕は止まってしまう。当然後ろにはミサイルが迫っていた。

「これで……」

「しまっ……!」

「チェック（王手）ですわ！」

そして二人同時にミサイルに当たってしまい、

チユドオーンッ！！

僕の意識はここで途絶えてしまったのだった……。

……

「ああ！織斑君達が！」

「……二人とも、機体に救われたな。」

「え？」

「一夏！良太郎！」

二人はオルコットの放ったミサイルの直撃を受けてしまった。今私の目の前のモニターには黒い煙しか映ってなかった。

しかし、しばらくすると黒い煙が段々と薄れ、二人の姿が現れた。

一夏の白式がその名に相応しい純白の姿に変わり、良太郎の周りが

線路のような物に囲まれている姿に変わった状態で。

『ま、まさか……！二人同時にファーストシフトを！？あなたがた、今まで初期設定で私と戦っていたのですか！？』

オルコットの問いに一人は何時ものように、もう一人は、何時もなら絶対に言わないように答えた。

『よくわかんねえけど……とりあえずこれでこのISはようやく俺専用になったみたいだな。……良太郎！大丈夫……夫……』

……か！？』

「良太郎……！？」

『……ようやく暴れられるぜえ！』

モニターに映っていたのは、えらく目つきの悪い良太郎だった。

……

俺の目の前に居るのは良太郎……のはずなのだが……。

「……ようやく暴れられるぜえ！」

そこには髪が逆立って一部に赤いメッシュが入り、赤い目をギラギラと戦ったそうな表情に輝かせた良太郎がいた。

「お前は……!?まさか……デンオウ、なのか!？」

「おう、その通りだ坊主!」

「な!? ISのAIが操縦者の意識を乗っ取ったとでもいうのですか!？」

俺達は驚愕した。ISのAI自身が意思を持ち喋った事はおろか、操縦者の意識までもを手中に収めるなど、前代未聞過ぎるからだ。そんなことを考えているとデンオウがまた話をする。

「とりあえずこれでようやく思う存分暴れられるんだ……!せっかくだし俺の格好いい変身、見せてやるよ!」

そうして良太郎……いや、今はデンオウ憑依良太郎（D良太郎）は黒いパスケースのような物を取り出し、自身のベルトについている赤いボタンを押す。
するとちょうど電車が駅のホームに入ってきて来る時に流れるような音が流れ始める。

「な、何だ!？」

「何なんですのこの音は!？」

俺達が驚いているとD良太郎はあの言葉と共に黒いパスをベルトへと一気にかざした。

「変身!」

【s w o r d _ f o r m】

電子音と共に、D良太郎の周りにあった線路に電車のような物が現れ、それぞれ4つに分かれる。

それらがD良太郎の身体に合体していき、黒と白、そして赤い装甲を形作っていく。

それはあたかも大昔の武将がつける陣羽織のようにも見えた。

そして線路のようなヘッドギアに真つ赤な桃のようなパーツがつき、それが2つに割れて頭の両側についた。

それが終わるとD良太郎は右手の親指で自分の顔を指差して、その後腕を大きく広げながらこう言ったのだった。

「俺……！ようやく参上！」

「……………」

「……………」

「……………」

アリーナにいた全員が沈黙し、D良太郎が大声を上げる。

「んだよ！反応しろよ！」

「ぎゃ、逆ギレかよ！？い、いやそんな事言われてもなあ……………」

「

「まあいいか…………。オイ青角女！」

D良太郎がまた声を上げながらセシリアの方へと振り返った。

「なっ！ま、また言いましたわね！私にはセシリア・オルコットという名が……」あーもうごちゃごちゃうっせえんだよ！」なっ！？」

セシリアは反論の声を返したが、D良太郎が声で遮る。

「いいか？さつきも言ったが俺はお前をぶっ倒すって決めてんだ！そしてなあ！俺は最初から最後までクライマックスなんだ……！途中で泣き言は聞かねえぜ！行くぜ行くぜ行くぜえ！」

D良太郎はそう言いながらベルトの横についている4つの黒いパーツを組み立てて刀のような武器にして、それを構えたままに一気に間合いを詰め、横風に一閃を振るった。

「うおりゃあっ！」

「くっ！」

セシリアはかわすが、

「逃げんなこの青角女！」

D良太郎が左腕の犬のような形をした装甲からミサイルを発射する。それはそのままセシリア目掛けて飛んでいき、直撃した。

「きゃあっ！？」

「まだまだあっ！もう一丁！」

D 良太郎は次に足の装甲を展開させる。そこには赤い球体が2つついていて、良太郎が身体を回転させながら足を振るうとその2つは勢い良く飛び出していき、セシリアの周りで爆発する。

「ああっ！このっ……なっ!？」

「貰ったあっ！」

そのセシリアが怯んだ一瞬のスキにD 良太郎はそのままセシリアの懐に入り、手にした刀状の武器でスターライトmk?を切り裂いた。

「なっ!?!あ、あなたよくも……！」

「泣き言は聞かねえって言っただろっがあっ！」

「きゃあっ!?!？」

今やミサイルしか武器を持たないセシリアにD 良太郎は何度となく刃を叩きつける。俺は思わず間に入り、刃を受け止め叫んだ。

「オイ!やり過ぎだぞ!！」

「ああ?！」

「あ、あなた……!?!？」

「オイ!良太郎聞こえるか!今すぐ止めさせろ!良太郎!！」

ガキイツ!

「うわあっ!?!」

「きゃあっ!?!」

俺は良太郎に声をかけるがD良太郎は刃を振るい俺とセシリアを吹き飛ばして、こちらを見ながら言う。

「へっ!こいつなら起きねえぜ。さっきのミサイルで氣い失いやがったからなあ!」

「「なっ!?!」」

「だからとつとと倒されてるよっ!.....行くぜえ!俺の必殺技あっ!」

そう言いながら先ほどの黒いパスを取り出し、ベルトの真ん中へと近づける。すると電子音が流れた。

【full charge】

その電子音と共に赤い雷のようなエネルギーがD良太郎の手にした刃に集まっていく。

「俺の必殺技.....パート? (ワン)!!」

「くっ!」

そう言っで一気に刃を振りかざされようとした時だった。

『.....めて.....』

「ぐうつ!?!」

「えっ!?!」

『……………止めて……………!』

周りに声が響きわたり、いきなりD良太郎の動きが止まる。

「ぐっ!?!があっ!?!?テ、テメエ……………!?!」

『止めて……………!?!』

「……………良太郎……………なのか……………?」

俺が目の前で起こる事に混乱していると、白式のウィンドウにある説明が浮かび上がる。

【雪片式型 零落白夜発動】

「零落……………白夜……………?それに雪片式型って千冬姉の使ってた……………?」

呟くのと同時に、手にしていた刀が展開し、光の刀身を形成する。

『一夏兄……………さん……………!それで……………僕のシールドを……………!』

「良太郎!?!……………わかったっ!」

「ぐううっ!?この野郎放しやがれえっ!」

「うおおおおおおおおおおおっ!」

良太郎の声に従い、俺はD良太郎へと高速で近付きデノオウのシールドを切り裂いた。

その時、

ビイイイイイツ!

『織斑一夏、織斑良太郎両者のシールドエネルギーエンプティ。勝者、セシリア・オルコット。』

「へっ?」

「え?」

突然の勝敗のアナウンスに混乱する俺たち。そうしていると、デノオウが待機状態に戻り、良太郎がふらりと落ちていく。

「っ!良太郎お!」

落ちていく良太郎に何とか追いつき抱き止めるが、今度は俺の白式が待機状態に戻ってしまい、地面へと落ちていく。

「なっ!?お、おわああああっ!?!」

(ヤバイ……!後もう少しぶつかるっ……!)

そう思いながら目をつぶった時だった。

ガシッ！

「……………あれ？」

目を開くと地面まで数十センチというところで浮いていた。どうしてと思っていると上から声がする。

「全く……………レディーにこのような事をさせるなど……………！」

「なっ！お、お前！？」

振り向くとそこにはセシリアが俺のISSーツを掴んで浮かんでいた。

「か、勘違いなされないで下さいね！私は英国淑女として当然の事をしたままでですよ！」

「……………ありがとな、助かったよ。」

俺はセシリアに感謝を述べると地面に降ろして貰い、良太郎に声をかける。良太郎はなかなか気づかなかつたが、数分呼びかけると目を開ける。

「あ……………ごめんねー夏兄さん……………迷惑かけて……………」

「いいさ、とりあえず無事で良かったよ。」

とりあえず良太郎は目を覚ましたものの、身体が動かないそうなの

で保健室へと連れて行かれる事になったのだった。

第三話「アラワレロー・モモタロー」（後書き）

次回、IS・DEN・O 《インフィニット・ストラトス・デンオウ》！

『オメエ一体何もんだ？俺の意識支配を逃れるなんて？』

「というよりキミの名前は？」

「あ、そうだ。桃太郎みたいだし、モモタロスとかは？」

「あ、あれ？僕何でこんなところにいるの？」

「ち、ちよつと！良太郎さん何なんですそのその眼鏡！？」

「『ヒドいなあ、その言い方。それより……みんな、僕に釣られてみる？』」

次回！「鬼は外！キミは亀！？」

青空そらを駆けて俺、参上！

主人公&IS設定

織斑おりむら 良太郎りょうたろう

年齢 15歳

身長 165?

体重 52?

血液型 A型

誕生日 12月26日

本作の主人公。万年不幸体質で、何も無いところで転ぶ、財布を盗られる、不良に絡まれる、ドアに足の小指を挟むのは日常茶飯事。その不幸っぷりは見る者全てに同情の意を与えるほどである。

織斑家の家事を主に担当していたので、ある程度は料理が出来る。ちなみに彼が入れるコーヒードと彼お手製のデザートはかなり美味い。性格は弱気な部分が大いだが、一度やると決めたら頑固にやり遂げるなど、しっかりとした芯を持っている。基本的に真面目で優しい心の持ち主。欠点は純情過ぎる事である。勉強の成績はまあまあ、だが、体力が絶望的なので一夏と同じく藍越学園に入るつもりだった。

容姿は野上良太郎（佐藤健）を少し幼顔と女顔にした感じにプラス千冬さんみたいな風。

DEN-O 《デンオウ》

良太郎のIS。開発などの出所などは全く分かっていない謎のIS。
Imagine・AI（イマジン・AI）と言われる自身の意志を持つ特殊なAIを搭載している。

ワン・オフ・アビリティは【フォームチェンジ装甲変化】、初期形態であるプラットフォームフォームから、様々なフォームへと機体を変化させることが出来る。

また、それぞれのフォームには装着者との精神リンクを利用して、フォーム変化時に良太郎の身体をイマジン・AIが文字通り憑依するシステムを搭載している。またこのシステムは、この機体を装着した者と接触する事で他人にも憑依する事が出来たりする。

ソードフォーム/モモタロス

基本スペック

全長：185?

総重量：250?

パンチ力：5t

キック力：7t

ジャンプ力：一飛び35m（脚力のみで）

飛行速度：300?/秒

Imagine・AI・type1【モモタロス】（命名のほんさ

ん)がプラットフォーム状態の良太郎に憑依して変身した姿。
基本的性格は本家モモタロスと殆ど同じ。なので「強くカッコ良く戦う」事を信条とするモモタロスの性格もあつてか、基本の戦闘スタイルは大胆で大振り。

武装は腰部のベルトの両サイドにそれぞれ4つに分解されて装備したデンガツシャー・ソードモード、右腕ゴウカノン「四連装ビーム砲」、左腕ドギーランチャー「超音波追跡威嚇ミサイル」、両足モンキーレッグ「中にきびだんご型投下爆弾モンキーボムを内蔵」、背部バーディーウイング「特殊合金デンメタル製のカッターウイング」を装備している。

主な必殺技は「俺の必殺技・パート?」(エクストリームスラッシュ)

基本的な姿のイメージは電王ソードフォームにデンライナーの各車両が組み合わさった感じ。形的には白式とよく似ている。

ロッドフォーム/ウラタロス

基本スペック

全長：190cm

総重量：350kg

パンチ力：4.5t

キック力：9t

ジャンプ力：29m(脚力のみ)

限界深度：水面下3000m

最高速度：250km/秒（レドームによる飛行時350km/秒）

Imagin・AI・type2【ウラタロス】（これまた命名のほほんさん）が良太郎に憑依、変身した形態。

最大の特徴は背部に装備された超高度電子戦用ハイパーレドーム【イスルギ】である。索敵、情報伝達、プログラムジャミングなどをものの数分で完了させてしまうほどの高度演算能力を誇る。またレドームは分離し、遠隔操作が可能な海亀を模した高速飛行補助ユニットにもなる。

基本的な戦闘スタイルは原作のように相手に嘘を吹き困惑させ、強力な蹴りとロッド捌きで仕留めるのが基本だが、レドームによる相手のハイパーセンサージャックによる攪乱攻撃を使用することもある。だが、ウラタロス本人はあまり戦闘などは乗り気ではないので変身しても比較的戦闘時間は短い傾向にある。

武装はデンガツシャー・ロッドモード、イスルギ（主翼部ハイパーフォトンレーザー二門、外殻部に展開式レーザーミサイル発射口「左右に各十門」）、また、バーディウイング以外のソードフォームの武装各種を装備している。主な必殺技はフルチャージしたデンガツシャー・ロッドモードで相手を甲羅型の網「オーラキャスト」で捕える「ソリッドアタック」を加え、そしてそのまま動けない相手に対してイスルギと共に高速移動し、強力な蹴りを喰らわせる「デコンライダーキック」である。

形状はソードフォームから胸部装甲、頭部電仮面、バーディウイングを取り外した上に原作ロッドフォームの装甲類を装備、またレドームはイスルギの物で、電仮面は原作のヘキサゴンスキャンアイの部分がオレンジ色の逆三角形のバイザーとなっている。ちなみに通常時イスルギは二分割され、背中にミサイルランチャーポッドのよう

に装備されている。

主人公&IS設定(後書き)

各フォームの記事は登場後に追加します。

第四話「鬼は外！キミは亀！？」（前書き）

遅くなりました！ではどうぞ！

第四話「鬼は外！キミは亀！？」

『俺……！ようやく参上！』

『泣き言は聞かねえって言ったただろうがあっ！』

『だからとつと倒されてるよっ！……行くぜえ！俺の必殺技あっ！』

『この野郎お！放しやがれえええええ！？』

……

「うわあっ！？」

ガバツ！

「！？どうしたんだ良太郎！？」

僕が身体をガバツと勢いよく起こすと、隣にいた一夏兄さんが心配してくれたのか、大声でこちらに問う。

「い、いや大丈夫だよ一夏兄さん。というよりこは……？」

「保健室だ。それにしても三時間も起きないとはな……。とり

あえず水だ、飲むといい。」

「あ、篤さん……。ありがとうございます。」

僕は一夏兄さんに尋ねるが、隣にいた篤さんが変わりに答えてくれた。そして篤さんは僕にコップ一杯の水を渡してくれた。僕はよほど喉が渴いていたのか、一息に飲み干してしまった。

「ゴクツゴクツゴクツ！」プハアツ！はぁ……。！」

「よほど喉が渴いていたのだな……。」

「そりゃあ三時間も寝てればなぁ……。」

あまりの飲みっぷりに一夏兄さんと篤さんが苦笑しながら呟く。と、ここで僕は自分の腕にデンオウが無いのに気付いた。

「あはは……。あれ？デンオウは……？」

「ああ、あれなら横の机に……。」

僕がデンオウがどこにあるかを二人に聞いたちようどその時、

『俺はここだ！』

「……うわっ!?!」「」

僕達の目の前に現れたのは赤い鬼のような姿をした人？のような者のホログラムだった。

「なななな何だよお前は!？」

『ああ? デンオウだよデンオウ。』

「なあっ!?! おおおお前デンオウなのか!?!」

一夏兄さんはその赤い鬼みたいなホログラムを指差しながら大声で叫ぶ。

『人の事指差してんじゃねえよ! 「ゴンッ!」』

「痛てえ!?! てゆうか何で叩けんだ!?! ホログラムじゃねえの!?! つーか人なの!?!」

一夏兄さんの言葉にキレたデンオウはホログラムのはずなのに一夏兄さんの頭を殴った。一夏兄さんは痛みに転げ回りながらデンオウに質問するが、デンオウはさらに怒り浸透といった感じに答えた。

『うるせえんだよ!?! つーかホ、ホロなんたらってなんだ!』

「ホログラムだ。本当にお前はデンオウなのか……?」

『へっ! 当たり前じゃねえかよ! 俺は正真正銘デンオウそのもんなんだよ。』

篝さんの質問にデンオウは答え、篝さんは驚愕を露わにする。

「実体化するホログラム……! (まさかあの人なのか……?)」

小声であのウサミミお姉さんの事をボソツと言う筈さんだった。そうしているとデンオウがこちらに近づいてきて僕の顔を掴み話した。

『そーだよイお前名前は？』『ガシッ！』

「え！？な、名前？・・・お、織斑、良太郎だけど・・・。」

『・・・良太郎、お前俺の意識支配から逃れるなんて何もんだ？』

「」「意識支配？」「」

「その話、詳しく聞かせて貰おうか。」

「え？」

デンオウの発した言葉にみんなで顔を傾けていると、後ろから声がある。振り返ってみるとそこには織斑先生と山田先生が居た。

「千冬姉何でここ」「スパアンツ！」はげえっ！？」

「織斑先生だ、いい加減学べと言っただろう・・・。」

「ス、スミマセン・・・。」

相変わらず一夏兄さんは織斑先生に叩かれていたが、僕はとりあえず試合の時の事を尋ねてみた。

「織斑先生、あの試合の僕がオルコットさんのミサイルに当たった後って・・・？」

「ああ、まるで身体ごとデンオウに支配されているようだった。」

「そうだったんですか……。すみませんでした、織斑先生。」

僕は織斑先生に頭を下げ謝った。

「下げなくてもいい。……。それはそうとデンオウ、お前は一体何なんだ？」

『んだよ！俺がもともと聞いてたんだろぅが「文句があるのか……？」……。俺はイマジン・AI、自我を持つAI。その一号機だ。』

「……イマジン・AI？」「……」

織斑先生に質問されたデンオウが反論するも、織斑先生の気迫の前にたじたと静かに話し始めた。

『俺はISの操縦者のサポート用、いや、いつそのこと俺自身がISを動かせるようにするために作られたんだがよう……。』

「それってつまり……。自分で勝手に動けるISの研究をしてたってこと？」

「な！？馬鹿な！そんなことは有り得ない筈だ！」

「そうです！ISが自分から動くなんて有り得ません！」

僕の言葉に篝さんと山田先生が声を上げる。そんな中、織斑先生は一人冷静に二人をたしなめた。

「篠ノ之、山田先生。まあ落ち着け。」

「は、はあ……。」

「ではデンオウ、お前は誰に作られ、どうして織斑弟の手に渡るよう仕向けられた？」

二人を落ち着かせた織斑先生はデンオウに聞くが、デンオウは自身の頭を押さえガシガシ掻きながら言う。

「それが解つてたら世話ねえんだよ！チックショー！どうしたって俺は記憶が曖昧だし本来の目的のはずの意識支配も出来ねえんだよお！？」

「そつか……山田先生。」

織斑先生は少し考えて山田先生の方に向き返り話しかける。

「え！？あ、は、はいっ！？何でしょうか！？」

「デンオウの本体を少し調べてみてくれるか？」

「わ、わかりました！あ、あの～すみませんデンオウ、さん？」

「ああ？何だよ？」

織斑先生の指示に山田先生は自身の端末を取り出し、デンオウの方へ向きながら話しかけるが、当のデンオウはトゲトゲしい口調で返した。

「ひやつ!? え、えつとく!? す、すみません失礼します! えいつ!

『な、何しやが「プスツ!」ぎゃひんつ!?』

山田先生は怯みながらも自身の端末に繋いでいたコードをデンオウに差し込む。するとデンオウは奇声を上げながら倒れ、端末の方には続々と情報が送られ始めた。そして端末に映し出されたある情報を見た山田先生は驚きながら織斑先生に報告したのだった。

「凄いOSです……! それに拡張領域バスロットなんてラファールと比べると五倍もあります! ……え? コレって……? 織斑先生!

「何かわかったのか?」

織斑先生の問いに山田先生は頷き、デンオウに繋いだコードを取りながら答える。

「はい! どうやらデンオウは織斑君の脳波の信号には逆らえないように出来てるみたいなんです……。デンオウは織斑君との精神リンクを応用して織斑君にとりついてるみたいなんですけど、その精神リンクの絶対命令権は織斑君にあつてそれに使われているのが織斑君の脳波だと思えます……。」

「そうか……。他に何かわかったことはあるのか?」

「……すみません、コアのブラックボックスの方がかなり硬くて何も……。』おいコラこのメガネ女! テメエよくもやってくれたなあ!』ひゃあつ!? ゴゴゴゴメンナサイ!?!」

人に織斑先生は目をいつものように鋭くして言った。

「……二人共、もう今日は帰っておけ。後、今日聞いた事は他言無用だ。』で、でもよ千冬姉っ!』いいな?」

「は、はひっ!」

一夏兄さんは少し反論しようとするが、鶴の一声よろしく織斑先生の一睨みの前に引き下がり、一夏兄さんと篝さんは自分たちの部屋へと帰って行ったのだった。

「……」

「……」

「……え、えっとあの……。わ、私も失礼しますね……」

三人だけになった保健室での沈黙に耐えかねたのか山田先生も外へ出て行く。

「……」

「……」

なおも険しい顔をした織斑先生と僕は顔を見合わせながらもお互いに黙ったままでいるので、再び保健室を沈黙が支配していく。

(き、) 気まずいよ……!)

そう僕が思っていると、織斑先生が口を開いた。

「良太郎。」

「え！？な、何千冬姉さ、あ！いや織斑先生どうかしましたか！？」

「……先生と呼ばなくてもいい、今は二人だけだ。」

「あ。う、うん、千冬姉さん……。」

僕がぎこちなく答えると、千冬姉さんはいつもは見せないような柔らかな笑顔でこちらに話しかけてきた。

「よるしい……。身体の具合はどうだ？」

「だ、大丈夫だよ。……不幸体質は相変わらずだけどね……。」

「そうか……。」

ギョツ。

「ふ、ふえ！？千冬姉さん！？」

僕がそう返すと、千冬姉さんは僕に近づいて僕を抱き締める。いきなりの事に僕は混乱し、腕をジタバタさせる。そんな僕に千冬姉さんは静かにこう言った。

「……あまり無理をするな、良太郎。」

「っ！」

それは昔僕が一夏兄さんや千冬姉さんに心配をかけまいとイジメや不幸を堪えていた時に、千冬姉さんがかけてくれた言葉だった。・
・尤もその後僕をイジメていた子が謝りに来たり、いつも噛まれていた犬とかが吠えなくなつてて内心ビクビクしてたが。でも、少し不器用な千冬姉さんなりの守り方だったんだらうと、僕は思っている。なので僕も抱き返しなから言った。

「……………うん、わかつたよ千冬姉さん。」

「……………そうか。」

僕の言葉に千冬姉さんは少し頷くと僕の頭に手を置き、保険医の先生に僕の事を任せると、保健室を出ていった。そうしてその後僕は保健室の先生に許可を貰い、デンオウと共に自室へと戻って行くのだった。

……………

『ちつくしよー！なんだってんだあの真つ黒女！』

「ま、まあまあ……………」

自室に戻りシャワーを浴びた後、夕食を食べようと食堂へと向かう道すがら、デンオウがぼやく。まあまあとなだめていると、横の道から女の子が現れた。

「あ、りょーりょーだ〜。」

「あ、のほほんさん。」

現れたのはクラスメイトの布仏本音、通称のほほんさんだった。のほほんさんは僕の方を向くといつもものようにゆったりとした口調で話しかけてきた。

「りょーりょーあの後大丈夫だった〜？……ってずわっ！？何後ろの人！？」

『ああ？』

「ひゃあっ！」

「ちよっとデンオウ！……ってデンオウって呼ぶのもどうなのかな？」

「『どつゆつ事（だ）〜？』」

デンオウの存在に気付いたのはほほんさんがデンオウに脅されるのを止めようとするが、僕は少し疑問が生じた。その僕の言葉に二人はこちらを向き、同時に尋ねてきた。

「うん、えっとね。最初に僕がデンオウを起動した時はまだデンオウのイメージ・AIは半覚醒状態だったよね？」

「いまじんえ〜あ〜?」

『まあ……そうだな。それがどうかしたのかよ良太郎?』

のほほんさんは首を傾げるが、デンオウの方は少し納得する。僕は話を続けた。

「という事はさ、その時のデンオウはOSで動いてたからその本体がデンオウって呼ぶべきで、イマジン・AIのデンオウには名前がまだついてないから呼び方をどうしようって思っただけ……。」

『ああ!?!?デンオウにはデンオウで俺にはデンオウじゃない別の名前ですて……ああもう!ワケわかんねえ!めんどくせえ!何でそんな事言うんだよテメエは〜!』

「ガクガクガクガク!」あう!痛い痛い!」

僕の説明にデンオウ?いやイマジン・AIは自身の頭を抱えて悩み僕の肩を掴みながらガクガク揺らしてきた。僕らがそうしているとのほほんさんが話しかけてくる。

「んい、ねえねえりよーりよー。何だかよくわかんないんだけどその赤い人って名前が無いの?」

「あ、う、うん。」

「じゃあ私がつけてあげるよ!」

「『へ？』」

のほんさんのいきなりの発言に僕とAIは同時に声を上げる。そうしている間にのほんさんはぶかぶかの制服の両袖に隠れた手で頭を押さえながらブツブツと呟いていたが、何か閃いたのか急に目を開き手をポンと叩きながらこう言った。

「そうだ〜！さっきの試合の時の姿が桃太郎に似てたから〜モモタロスなんてどう〜？」

「『モモタロス（ウ〜）？』」

二人同時に呟く。

「えっと・・・何で桃太郎だと？」

「だって右腕は犬に似てるし〜それにあの足の奴はきびだんごみたいだし〜。あ、それに今の姿が鬼みたいだから〜。」

「『・・・・・・』」

「え！？あ、あれれ〜？気に入らなかった〜・・・？」

突然の沈黙に焦るのほんさん。

『桃太郎だからモモタロスって・・・お前なあ「スッゴクいいと思う。」センス・・・ってなあ！？』

「本当に!？」

「うん、ピッタリだと思うよ。それに僕、小さい頃とかヒーローに憧れてたし。」

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

後に聞いた話だけど、この時の沈黙でモモタロス（すでに呼称決定）は『二人ともセンスねえなあ・・・・。』と心で呟いていたそうだ。

「良かった〜ってあれれ？りょーりょーその箱は何〜？」

のほほんさんは僕が部屋から持ってきていた箱に気付き、尋ねてきた。

「ん？コレはね、食後のお楽しみって所かな？」

「『？』」

・・・・・・・・・・・・・・・・

「いやあ〜！うまい！ここの食堂、なかなかいいよな〜！」

俺と篤は千冬姉から半ば強制的に寮へ帰らされた後、食堂にきていた。ここの食堂は流石IS学園が国際色豊かであるのを体現している場所である。とにかくメニューが豊富なのだ。ちなみに今日俺が

選んだのはボリュームがたっぷり目なカツ丼、箸はいつものように和定食だった。カツ丼を食べ、その感想を言っていると箸がジト目で言ってくる。

「一々声に出すな！全く恥ずかしい……。」

「？何で恥ずかしいんだよ？」

「……もういい。」

「……拗ねちまったよ。と、そんなこんなしてると、」

「あ、一夏兄さん、箸さん。」

「や〜や〜二人共〜。」

「「うん？」」

声がかけられたのでかけられた方へ振り向くと、そこにはトレーを持った良太郎とのほんさんが立っていた。

「はあ、ごちそうさまでした。」

「ごちそうさま〜」

一夏兄さんたちと合流した僕たちはまずご飯を食べてしまった。ち

なみに頼んだのは僕は肉うどん、のほほんさんは洋定食だった。

「良太郎、身体の具合はどうなのだ？」

「うん、まだ少し所々筋肉痛だけど・・・まだ動けるかな。」

「まあ、いつもの体育の授業とかに比べたら・・・なあ？」

「あはは・・・確かにね。」

そんな風に談笑していると、のほほんさんが僕にあの事を尋ねてくる。

「あ、そうだりょーりょー。さっきの箱の中身って？」

「あ、そうだった。」

その言葉に僕はみんなで座っている丸テーブルの真ん中にあの箱を置き、箱を開く。中に入っているのは・・・

「おおー！プリンじゃん！」

「そう、僕手作りのプリンだよ。ホントはあの試合の後に食べて貰うつもりだったんだけどね。」

「夏兄さんの感激の言葉に僕は答える。

「スツゴク美味しそう！」

「コレは普通に売れるのではないか!？」

固まったモモタロスに近寄り、壊れてしまったのかと心配する僕だったが、モモタロスはいきなり大声を上げた。

『うまああああああああああああああああいつ！』

「ドンガラガラガッシャン！」

拍子抜けなモモタロスの言葉に僕らは盛大にずっこけた。

『何だよコリヤア……！！とんでもなくうめえじゃねえーかよ』

そんな僕らをものともせず驚嘆しているモモタロスに一夏兄さんは指を突きつけながら言う。

「お……！！」

『ああ？何だよガキ？』

「お前は一体何なんだモモタロス！！」

『俺は俺だよ！つかお前らもさっそくその名前で呼ぶのかよ！』

その後モモタロスと一夏兄さん達が言い合いをしていたが、僕のプリンを上げて一応元の鞘に収まったのだった。ちなみにプリンはみんな気に入ってくれたようだった。うん、嬉しいな。その後、みんなそれぞれ別れ、僕も自室へと戻って寝たのだった。とりあえず今日は疲れたなあ……。そんなこんなで、僕の意識はすぐに消え

バタンッ！

「ゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイ
イゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイ
イゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイーッ！！！！」

「りよ、良太郎君！？」

呼び止める女の子の声を無視して、僕は全速力でその場から去ったのだった。

「はあ……！はあ……！一体……！何がどうなってるんだろ……？」

先ほどの部屋から全速力で逃げ出し、廊下の壁に手を当てながら息を切らしていると、不意に後ろから声がかかった。

「あら？良太郎さん？」

「え？」

振り返って見てみると、そこにいたのは昨日試合をしたオルコットさんだった。

「まあ、どうしてこのような所に？ここは食堂とも離れていますし……それにその格好はどうされたのですか？」

「な、何だよ今の声!？」

『貸してよ、キミの身体。昨日みたいになさ。』

謎の声はそう言つと……つてあれ?か、身体が!?

「え、う、うわあっ!?!？」

「「「良太郎 (さん) !?!」「」」

「『はあ、この身体良いよねえ。』」

「りよ、良太郎さん何ですのその眼鏡は!？」

「『酷いなあ、その言い方。そんなことより……千の偽り、万の嘘。言葉の裏には針千本。それでもいいなら……みんな、僕に釣られてみる?』」

第四話「鬼は外！キミは亀！？」（後書き）

次回！IS・DENIO 《インフィニット・ストラトス・デンオ
ウ》！

「うんじゃ〜浦島太郎でウラタロス！」

『この亀野郎！』

『桃太郎には言われたく無いなあ。』

「『デンオウ……タオス！』」

「俺、参上！……って良太郎何で呼ばねえんだよ！」

「お前、僕に釣られてみる？」

次回、「サギ師と敵襲?!」

青空^{そら}を駆けて俺、参上！

第五話「サギ師と敵襲?! 前編」(前書き)

遅くなってしまい申し訳ありません!長いので前後編になりました。
後編は出来れば日曜日に上げたいと思います。
では、どうぞ!

第五話「サギ師と敵襲?! 前編」

「『みんな、僕に釣られてみる?』」

「『……………!?!?』」

俺達の目の前に居るのは良太郎。の、はずなんだが……そこに立っている良太郎は前髪を左側に大きく分け、後ろ髪をツンと立たせ、青いメッシュの髪を右側に垂らし、眼鏡を架けていた。眼鏡の奥の目を怪しく青く輝かせながら俺達を見つめる良太郎に、モモタロスは詰め寄りながら言った。

『……………な』にが“僕に釣られてみる?”だ! テメエもイメージン・AIだなあ!』

「『な!?!』」

「イメージン、AI?」

モモタロスの言葉に驚く俺と篤。一人事情を知らないせ、え、え〜と……………代表候補生だけは首を傾げていたが。

「『何の事かなあ? 赤い人?』」

『ぶざけてんじゃねえ! この身体は俺のだ! 出てけ!』

「『ちよ、ちよつと!?!?』」

そう言いながらモモタロスは赤い光の玉になり良太郎の身体へと入

り込む。モモタロスが入り込むと、良太郎の身体がガクガクと揺れ、しばらくすると赤い光と青い光が良太郎の身体から出て行く。

「うわぁっ!」

「っ!良太郎!」

「良太郎!無事か!?!」

「良太郎さん!聞こえますの!?!」

2つの光が飛び出した後、良太郎は腰をついて倒れ込む。俺達は慌てて近寄るが、そんな時に光の玉が地面に降り一つはモモタロス、もう一つは青い、亀の甲羅のようなものをイメージしたのだろうか、そんな姿をした青い人が現れたのだった。

「おっと!.....あゝあ.....」

現れた青い人にモモタロスはズカズカと近づいて行きながら、凄みのある声で言う。

「昨日の夜良太郎が寝た後から磯臭え匂いがすると思ったらよお.....!オイテメエ!この身体は俺なのだ!勝手に使ってんじゃねえよ!」

「アレ?見たところあんたも僕と同類の格好に見えるんだけど?」

モモタロスは青い人に掴みかかりながら言うが、青い人は余裕の表情で言い返す。

「これは……!？」

「一体何がどうなってますの!？」

篤と代表候補生が混乱の表情でこちらを見る。……お、俺だつてわかんねえよ!？そんなこんなしていると、

『うるせえんだよこの野郎っ！それに良太郎のイメージ・AIは俺が一番最初だ！先輩とか、もっと尊敬しやがれ!』

『……格好悪いよ？せ・ん・ぱ・い。大体、名前もモモタロスだなんて……センスを疑うね。』

その言葉にモモタロスが青い人の首元を掴んだ。

ガッ!

『何だとテメエッ!』

ガシッ!

『……痛いなっ!』

ガンッ!

首元を掴まれた青い人は掴まれているモモタロスの腕を掴み返し、そのままモモタロスの身体を壁に打ちつけた。

『ッ!この野郎おっ!』

「ちよ、ちよつと止めてよ二人共！」

『良太郎！？……ちつ、良かったなあ、運が良くてよ。』

青い人の言葉にまたもや掴み掛かり、殴りかかろうとしていたモモタロスだったが、良太郎の声に少し振り返り、手を青い人から放した。

『ふう……。やれやれ、弱い獲物ほどよく吠える、みたいだね。』

『何だとお！「モモタロス！」……。ちつ。』

青い人の挑発にモモタロスが再び掴みかかろうとするが、良太郎が止める。良太郎は一つため息を落とすと、俺達の方へ振り返り言った。

「え、えつと……。とりあえず、場所を移そうか……。」

「コポポポ……。」

コーヒーメーカーが鳴らす音の中、私達は良太郎さんの部屋にいます。コーヒーのなかなか良い香りに期待している一方で、あの方々はというと……。

『……。』

『・・・・・・・・・・。』

睨み合いを続けていましたの。

(・・・・・・・・一体何がどうなってますの・・・・・・・・？この私、セシリア・オルコットさえ知らない装備にAI・・・・・・・・一体何なんですの・・・・・・・・？)

そんな風に思っていると、良太郎さんの声がしましたの。

「一夏兄さん、コレお願い。」

「おう、わかった。」

その言葉と共に一夏さんと良太郎さんがトレイにコーヒーを載せてやって来ましたの。

「ほら、等。それに・・・・・・・・」

一夏さんが篠ノ之さんにコーヒーのカップを渡し、一夏さんが次に私に渡そうとしますが、一夏さんは一瞬言いよどんでしまいましたの。

「あ、一夏さん？セシリアとお呼び下さいな。」

「え？あ、お、おうセシリア。ほら、コレ。」

「はい」

ふふふ 呼んで貰いましたわ そんな事を考えながら、コーヒーに

口をつける。コーヒーはなんとも言えないコクと風味、香りがしましたの。

「モモタロス、それに……キミも。」

『わりいな、良太郎。「ズー」うまいっ!』

『……それじゃあ僕も頂くよ。』

そうして全員がコーヒーを口に含んだ後、良太郎さんが言いましたの。

「え、えつと……。とりあえず、どこから話そうか……?」

「……というワケだったんだけど……。『あ、あり得ませんわ!そんな事!』……だよね……。」「

「まあ、セシリアの言いたい事も判るけどさ……。あれを見たら……。なあ?」

「夏兄さんは頷きながらも、部屋のある一点を見つめる。全員がその方向を向くと……。」

『良太郎!』

『良太郎、だっけ?』

『『コーヒー、お代わりだ!』(貰える?)』

『』・ツ!・!』』

『何だよこの野郎! マネすんな! それともなんだあ? やんのかあ!
? ああ!?!?』

『あーあー無駄に暑苦しくって……そういうの止めない? 面倒だからさ。』

「」」」」」」」」」」」」

モモタロスと青い人がまだにいがみ合っていた。と、ここで。

「コンコン。」

「」」」」」」」」」」」」

コンコンと僕の部屋の戸をノックする音が聞こえた。モモタロスと青い人以外のみんなが一斉にドアの方を向き、僕はドアを開けた。そこに居たのは……

「あ、りょーりょーおはよ〜。」

「の、のほほんさん?」

のほほんさんだった。いつもの袖がぶかぶかの制服を着たのほほんさんは首を傾げながら僕に言う。

「んい、りょーりょー、朝ご飯まだ〜? 一緒に行こうよ〜……
ってアレ? そこにいるのいつちーにほーほーにせっしー?」

「え？のほほんさんか？」

気付いた一夏兄さんがこちらに近づきながら言う。

「やあやあ〜いっちょ。みんな集まってどうしたの〜？」

「い、いやな。ちょっとヤボ用が……」あ！テメエ昨日の！
あ！オイ！？モモタロスお前！」

一夏兄さんが少し説明に言いよんどんでいるとモモタロスがドアの方
に来た。モモタロスのはほんさんの前につかつかと来るが、

「あ〜 モモタロスおはよ〜」

『え！？あ！お、おう。……おはようございます……』

屈託のないのほほんさんの笑顔の前に小さく返事をしたのだった。
そうしていると、

『あれ？誰だいその娘？』

「え？キ、キミ。いつの間に!？」

「んい？う、うわあ〜 この人誰〜!？」

いつの間にか青い人がこちらに来ていた。

『テメエ何してんだ!』

『桃太郎は黙っててよ。「なんだとお!」ねえ、お茶でも……
どうだい?』

「んい、いいいいいよ」

そう言つて僕の部屋に入るのほほんさん。その後モタロスはイラ
イラと足踏みをしていたが、何かを閃いたのか、手をポンと叩いて
のほほんさんへ言った。

『そつだお前!』

「ふえ?私?ちなみに私の名前は布仏本音だよ」

『うんじゃ本音!コイツ、まだ名前ねえからつけてやれ!』

「「「はい!?!」」」

「え、この青い人?いいよ」

驚く僕たちをよそののほほんさんが考えるが、少しつまったのが、
僕に質問をする。

「ねえねえりよーりよー。この青い人何に見える?」

「え?え、えつと……亀とか……?」

「亀〜亀〜……はっ!そつだ!浦島太郎だ〜 それじゃあ〜、
浦島太郎でウラタロスなんかどう?」

『浦島太郎お?!』

のほほんさんの言葉に素っ頓狂な言葉を返す青い人。するとモモタロスは大声で笑い、ウラタロス（仮）を指差しながら言う。

『ぶわっはっはっはっ！！ぴったりじゃねえかよ！この亀野郎！』

『っ！……どこかの真っ赤な桃太郎には言われたくないなあ？
ねえ先輩？』

『ああ、全くだな！……ってこの亀野郎！何て言いやがったあ
！？』

「モモタロス〜！」

「ああもうまたかよ！」

再び取っ組み合いを始めようとするモモタロスをみんなで押さえなだめる。とりあえず抑えてベッドに腰掛けさせ、僕はウラタロスに質問をする事にした。

「え、えっと……ウラタロス？」

『……すでに呼び方になってるんだね……。まあいいか。
で？何だい良太郎？』

「キ、キミはどこから来たの？そしてキミは誰に作られたのか知ってる？」

僕の質問にウラタロスは少し窓の方を見ながら、トーンの下がった声で言い始めた。

『……僕はね……ある研究所に居たんだ……。』

「……え……?」「……」

『ん……?』

『毎日毎日、研究所のコンピューターの中を何年も何年も、ずっと一人ぼっちで……寂しかった……。でも、こんな僕にも目標があった。いつか……いつかISに搭載されて、この学校に来るんだ!……って、何度も何度も、味も何もしない唇を噛み締めながら、ずっと……一人ぼっちで。』

『お、お前……!ううっ!』

「そ、そんな過去があったとは……!くっ!」

「っ、辛い思いをしたのだな……!ぐすっ!」

ウラタロスの言葉にモモタロス、一夏兄さん、篝さんは目に涙を浮かべ、口を押さえながら言う。だが、

「お待ちなさい!」

「……え?」「……」

僕たちがいきなりの声に振り返ると、セシリアさんが仁王立ちで立っていた。

「青い貴方、いやウラタロス!貴方……嘘をついてますわね!

「？」

「「な!?!」」

『なあ!?!嘘お?!!』

いきなりの言葉にモモタロスたちは驚きを露わにする。

『……なんの事かなあ』とぼけても無駄ですわ!』……。』

あくまでもシラを切ろうとするウラタロスにセシリアは詰め寄りながら言う。

「簡単な話ですわ!貴方が研究所などで研究されていたのなら、代表候補生である私の耳にもそのようなAIが開発されている、という噂があつたはずでしたわ。しかし、私はそのようなお話を聞いた事はありませんもの!」

『……ご名答。その通り全部真つ赤な……嘘さ。』

胸を張りながら答えるセシリアさんに、賛辞の言葉を贈るウラタロス。そうしているとモモタロスがづかづかと近寄り、ウラタロスの胸倉を掴みながら言う。

『テメエ!?!騙しやがったなあ!?!俺の涙返せ!』

「そーだそーだ!」

「騙すとは卑怯だぞ!」

モモタロスたちは非難の声を上げるが、当の本人のウラタロスはなんのその、といった感じで答える。

『嘘ついて、騙してこそその人生だよ？この世を面白くするのは、9の真実と、一つの嘘さ。』

『ふざけてんじゃねえよっ！！この亀野郎お！』

『桃太郎には言われたくないなあ。僕はあくまで事実を言ったただけだよ？』

『なにー！』

ウラタロスの言葉に、またモモタロスは拳を強く握りしめ、殴りつけようとするが、

「キンコーンカーンコーン……」

「……！？」

『？』

『何だあ？今の音？』

チャイムが鳴り響いた。……ってあれ？い、今何時だっけ……
・！？！そんな風に思考を持って行っていると、

「キンコーン」

「……！？」

突然なる僕の部屋のベル。．．．ま、まさか！そんな僕の表情から察したのか、一夏兄さんが青ざめた表情かおで静かにドアへ近寄り、あくまで静かに開けると．．．

「げえ！？関羽！？いや千冬ね「ガツンッ！」げばべっ！？」

「誰が三国時代の英雄だ。それより．．．織斑兄、弟、篠ノ之、オルコット、布仏。貴様らHRに遅れるとは．．．良い度胸だな。」

奇声を上げて倒れ、死人と化した一夏兄さんの身体しだいの先にはそう、織斑先生が立っていた。

「ひゃあ！？」

「スパパパパーンッ！」

逃げようとするも、織斑先生の出席簿が唸りを上げ、僕らは全員叩かれる。みんなが激痛に阿鼻叫喚の絵図を見せる中、僕はやっぱり授業前の予鈴だったよ．．．と、頭に激痛を感じながら思ったのだ。

．．．

「ではこれより、ISの基本操縦技術の訓練を開始する。織斑兄、

織斑弟、オルコット、前に出る。」

「はいつ！」

「は、はいつ！」

千冬姉の必殺、いや、ホントに死人が出るんじゃないかと思うほど痛い出席簿アタックを受けた後、俺たちはウラタロスの事を話し、少しは免罪された。千冬姉はウラタロスを引っ張っていき、モモタロスはそれについて行ったのだった。・・・そういや山田先生に質問させるとか言ってたけど。大丈夫か？ウラタロス相手に・・・ま、気にしないでおこう。その後、遅れて教室に入ると、どうやらセシリアがクラス代表を辞退したらしく、俺がクラス代表、良太郎がクラス副代表となっていた。・・・俺たち負けたんだけどなあ・・・？モモタロスの所為とはいえ。で、そんなこんなで今は一時間目、ISの基本操縦を実践しろー、という授業だそう。そんなこんなを考えると、千冬姉が声を発する。

「よし、では全員ISを展開しろ。」

「はいつ！」

よし、来い！白式！・・・ってあれ？来ない？

「どうした織斑兄。早くしろ！」

「え！ちょ、ちょっと待ってくれ！いや！待ってください！」

千冬姉が催促をするので、余計に焦る俺。どうしたんだよ！白式！

そんな風に考えていると、セシリアが声をかけてくる。

「あ、あの、一夏さん大丈夫なの？」

「あ、ああわりいセシリア。心配してくれて。」

「いえいえ！お気になさらずに！それより展開の事ですが、身体をISに飛び込ませるようなイメージですわ。」

「飛び込ませるように……か。……こうか？」

セシリアのアドバイスに、何かを掴んだ俺は、白式の待機状態であるガントレッドをつけた右手を掲げ、唱えた。

「よし、んじゃ……。来い！白式！」

シュパアアアアアツ！

その瞬間、光が瞬き、周りを照らすと俺の手は白式の物に変わっていた。つまり……

「……。出来た！」

「さすがは一夏さんですわ！」

「ああ！ありがとなセシリア。お前のアドバイスのおかげだよ。」

「い、いえ！そんな大したことではありませんわ！／／／／／／／／／」

俺はセシリアに礼を言うが、セシリアは顔を真っ赤にしながら謙遜

する。と、ここで

(・・・しかしなあ・・・？なんか態度が違ってるよなあ・・・セシリア。良太郎の部屋にいた時から、なんだか・・・なあ？心なしか篝からの視線も日増しにキツくなってるし・・・)

そんな事を考えていると、まだ展開していない良太郎が千冬姉に質問をしていた。

「あ、あの〜織斑先生・・・？」

「何だ織斑弟。お前も早く展開しろ。」

「あ、いや、は、はい・・・。」

良太郎は力無く答えると、左手を掲げる。すると待機状態のデンオウが光り出し、ベルトのような物に変わって良太郎の手に収まっていた。

「え、えっと・・・こうかな・・・？」

そのベルトを腰に巻き、手にした黒いパスをベルトの真ん中に近付けながら、良太郎はあの言葉を唱えた。

「変身！」

その瞬間、眩い光が溢れ良太郎を包み込み、良太郎はデンオウを纏った姿になっていた。

「あれが良太郎君のISかあ〜。」

「近くで見るとますます細いよね。」

「でもあれ？何だか姿がもう一つ無かったっけ？」

周りの女子達がザワザワと感想を述べる。・・・確かに何だか違うよなあ、デンオウって。

それにこの前ファーストシフトをしてたんじゃなかったっけか？そんなこんな考えていると、良太郎はやっぱりといったような顔をしながら千冬姉に言う。

「やっぱり、こうなるみたいです、織斑先生。」

「言いよんだのはこの事か。・・・問題はない。いや、今は授業中だ。お前自身がやる方が良い。」

「そうですか・・・。分かりました。」

良太郎が小さく呟くの見た後、千冬姉は俺たちに向き返る。

「よし、全員揃ったな。」

「」「はいつ！」「」

「では、飛行を開始しろ。」

その言葉とともに一斉に空中に飛び上がる俺とセシリアと良太郎。飛行ではなかなかセシリアについて行く事が出来ず、千冬姉に怒られちまったよ・・・。んで、地上から20メートルほどの所で千冬姉から止まって降りてこいとの事で、セシリアが始めに降りる事

そう言いながら笑顔を向けてくる。そうしていると、箒が不機嫌そうな顔で近付いてきた。

「一夏！何をデレデレとしている！」

「なっ、べ、別にデレデレなんかしてないだろ！」

俺は箒に反論するが、箒は無視してセシリアに突っかかる。

「セシリアもセシリアだ！お前が何で一夏の心配をする！？」

「あら、何故私は一夏さんの心配をしては駄目なのですか？……最も貴方に断りを入れないといけないなど、そんな条件は無い筈ですわ！」

「くっ……！お、お前には関係ないっ！一夏は！私の幼なじみだ！」

「あら？という事は幼なじみにはそんな条件があると？」

「何をっ！」

そう言って突っかかるうとする箒だったが、

「何をしているこの馬鹿者共が！」

スパパァーンッ！

「「い、痛い！？ってはっ！？織斑先生！？」」

千冬姉にいつもの出席簿アタックを食らって痛がる二人。そうしている
と千冬姉が俺の首根っこを猫を掴むように掴んで、俺に言う。

「うわっ！？ち、千冬姉なにすんだ」「スパアーンッ！」「ふげらっ
！？」

「織斑先生だ。いい加減学べ。学ばないなら死ね。」

（いやそれヒドくねえ！？」「スパアーンッ！」「ふげっ！？）

「覚えないう前が悪い。いいからサツサとここからどけ。」

「おわあっ！？」

「一夏！」

「ッ！一夏さん！」

なんだかんだで叩かれてしまい、力が抜けた俺を千冬姉は箒達の方
へ投げ渡す。箒とセシリアが支えてくれたが、それにしても投げる
事ないだろ！？

「弟の邪魔をして言う事か？織斑兄。」

「弟？・・・あ！」

『一夏兄さ〜ん！大丈夫〜？』

「良太郎ー！スマン忘れてたー！こっちは大丈夫だー！」

『アハハ……。というか忘れてたんだ……。』

やっべー……。そっぴやまだ上に居たんだったよな。見上げた先にはデンオウを展開した良太郎がこちらを心配そうに見つめながら空中に浮いていた。

「そういう事だ。だから篠ノ之、オルコット。さっさと織斑兄を連れていけ。」

と、いうワケでセシリアと箒にズルズルと引きずられて行く俺だった……。。

『では、織斑弟。目標地上から十センチまで降下しろ。』

「は、はい!」

一夏兄さん達がどいた後、織斑先生から通信が入る。うーん十センチかぁ……。

「と、とりあえずこう、だったかな?」

そう言って授業で言われた通りに降りようとした時だった。

ドカアアアアアアッ!

「へっ!?!」

「「「なっ!?!」」」

いきなり爆音が轟き、その方向に向き返ると、僕らがいる校庭の校舎に近い方からモクモクと土煙が上がっていたのだった。そしてその土煙が晴れて現れたのは……

『良太郎おーーーーーっ!』

「モ、モモタロス!!?」

モモタロスだった。ってアレ!? 何でここに!?

『テメエ何勝手に一人で動かしてんだよ!』

「え、い、いやそんな事言われても……。」

『いいからサツサと替われえ!』

「うわあっ!?!」

光の玉となったモモタロスが僕の身体に入り、無理やり身体を動かそうとするが、僕が抵抗した所為か、空中でもみくちゃになってしまっ。

『クツ!このおっ!オイ良太郎!放せよ!』

「ちょ、ちょっと待ってよ!うわあっ!?!まず、どうして……っ!ここに居るの!?!って!」

『なあ!?!』

「『うわあああああああああああつ!?!』」

ドカアアアアアアアアアアアッ!

空中でモモタロスともみくちやになつていると、僕はデンオウのバ
ランスを崩してしまつたみたいで、モモタロスと一緒に真つ逆さま
に墜ちてしまつたのだった。墜落した場所に一夏兄さん達が駆け寄
り、僕に声をかける。

「良太郎!大丈夫か!?!」

僕は何とか答えようとするが、

「う、うん……大……丈夫……だふぎゆう。」ドサッ。「」

そのまま仰向けに倒れてしまった。

「りよ、良太郎お!?!」

「しっかりするのだ良太郎!」

「良太郎さん!?!お気を確かに!?!」

崩れゆく意識の中、最後に見えたのは織斑先生が泣き顔で近づいて
くる山田先生から事情を聞いて呆れかえっている様子だった。モモ
タロス……何したワケ?と、横でのびているモモタロスに問い
かけながら、僕は意識を落とした。

……

一方、その頃。

「『デンオウ……倒す!』」

IS学園に闇が迫るつとじていた。

第五話「サギ師と敵襲?! 前編」(後書き)

次回!後編!

第六話「サギ師と敵襲?! 後編」(前書き)

なんか展開が強引杉田かも……。とりあえずお待たせしました
!どうぞ!

第六話「サギ師と敵襲?! 後編」

「う、うん……。はっ!？」

ガバツ!

「うおっ!良太郎起きたのか?」

僕が身体を起こすと、そこに見えたのはロッカールームの天井と夏兄さんの顔だった。

「一夏、兄さん?僕、どうしてたんだっけ……。?」

「ああ、お前が下に降りようとしてたらモモタロスが来てな、もみくちゃんになって一緒に墜ちちまったんだよ。」

「……。そうだったね……。」

一段落ついた僕は、少し気になっていた事を聞いてみた。

「一夏兄さん、モモタロス達は?」

「ん?アイツ等なら千冬姉に説教喰らってるぜ?なにせ山田先生泣かしたし、お前を傷つけたからなあ。」

「山田先生……。どうして泣いてたの?」

「ああ、山田先生はウラタロスに質問してたらしいんだけどな。途中、ついて来てたモモタロスとウラタロスが喧嘩をやり始めたらし

くてな。んで、途中でデンオウが起動したのに気付いたみたいで、モモタロスが山田先生の静止を振り切って壁を突き抜けながら校庭に来たのを追いかけてたんだと。」

・・・・・・・・

「・・・・・・・・・・ハア・・・・・・・・！」

「ははは。。。そりゃため息出るよな。。。。」

呆れて物も言えず、大きなため息をつく僕に、一夏兄さんは僕の肩に手を置きながら言う。

「ま、とりあえず一件は落着してるし、気にすんなよ良太郎。」

そう言いながら一夏兄さんは椅子から立ち上がり、背伸びをしながら出口へと向かう。

「え、兄さんどこ行くの？」

「ん？あ、あははは。。。いやな。。。授業の後始末。」

ガツクリと肩を落としながら、先ほどの僕のため息より大きなため息をはく一夏兄さん。

「な、なるほど。。。そうだ兄さん、僕も手伝うよ。」

「え！いいのかよ良太郎！？」

僕の言葉に最後の希望とばかりに目に涙を溜めながら言つ「夏兄さん。」

「う、うん。一人より二人でやった方がいいし、それに僕の奴もある訳だし……それに、」

……

ザクツ!

「……ツ!……ウウウウツ!ああもう!何だつて俺がこんな事しなくちゃなんねえんだよお!?!」

「……」

俺と良太郎が校庭に着くと、そこにはモモタロスがスコップ片手に文句を垂れてながらも穴を埋める作業をしていた。……アイツホログラムなんだよな?ホログラムの筈なんだよな!?!何でスコップ持ててるんだよ!?!

「……?ああつ!良太郎!それにガキ!こんな所で何してんだよ!」

俺達に気付いたモモタロスが声を荒げながら近づいてくる。ていうかコイツは……!

「何度も言つがガキ言つな!俺の名前は一夏つて言ってるだろモモタロス!?!」

『うつせーんだよっ！このトーヘンボウズ！』

「なっ！？なんだよいきなり！？大体なんだよトーヘンボウズって！？」

「一夏兄さん！モモタロス落ち着いて〜！！」

「……………で？なんで先に来て穴を埋めてたワケ？」

良太郎により落ち着かされた俺とモモタロス。んで、今俺はモモタロスに質問をしている。

『テメエ等のねーちゃんの真っ黒女からやって来いって言われたんだよ！罰だ、つてな……………！ああっ！もうム力つくぜえ！？』

……………まあコイツが自分の罰が全部自分の所為って事に気付くワケねえよな……………。そんな事を考えていると、今度はモモタロスが良太郎にすぎる。

『なあなあ良太郎〜！お前から言っつてやってくれよお〜！「イヤだよ。」はっはっは、流石良太郎！引き受けてくれると……………つてなあ！？イヤだあ！？』

「うん、イヤだ、つて言っつたんだ。」

良太郎は少し鋭い目をモモタロスへと向けていた。

(……………あ、これやべえ。良太郎久しぶりに少し怒ってる……………

!?)

「モモタロス、山田先生を泣かせたよね。」

『ああ、あのメガネ女の事か?』

「忠告も聞かないで、ただウラタロスとの喧嘩で先生の仕事も邪魔して、校舎や校庭も壊して……!」

『え、あ、あの〜良太郎?』

普段の良太郎とは違う迫力に、思わずタジタジになるモモタロス。あの良太郎は頑固だからなあ……と俺は少しトラウマになりかけの記憶を走馬灯のように思い出していた。

「……………」

クルリ。

『良太郎!?良太郎お〜〜!?!?』

良太郎は相当怒ってるのか、最後には言葉もなく踵を返して去って行く。

「ありや相当怒ってるなあ……。」

『何で良太郎あんなに怒ってるんだよ!トーヘンボウズ!』

「なんだよそのあだ名!?お前がそついう態度だからじゃねえの!」

『なっ!?!そいつはどついつ事だよ!?!』

モモタロスが驚きを露わにする。

「お前のそういう態度がいけないんじゃないのか?悪い事してんの
に自覚が無いっていつかさ。」

『なっ!?!そりゃ……………ツ!?!この匂い……………!
』?』

俺の言葉にうなだれていたモモタロスだったが、突然顔を上げる。

「な、何だよ。どうしたんだよモモタロス!?!」

モモタロスは静かに告げた。

『……………やべえぞ。俺でもあの亀野郎でもねえ!別のイマジンA
Iの匂いだ!』

「なっ!?!」

……………

「……………。」

校庭から少し離れた所へと来て座りこむ僕。

「……………はあ。」

ため息をついて腰掛けていると、

「あ、織斑君？」

「え？や、山田先生？」

声をかけられた方へ向くと、僕の前に山田先生がいた。僕は思わず立ち上がって謝り始めた。

「山田先生すみません！ホントにすみません！」

「ふえ！？な、何のことですか！？？」

「……………という事でホントにすみませんでした！僕がちゃんとモタロスを見ておけば良かったのに……………！」

「あ、謝らないで下さい織斑君！今回の事は押しに弱い私の所為でもあるんですから……………！ホントにすみません！」

「いや、山田先生は悪くないです！だから……………！」

「そんなことないですよ！織斑君が謝ることはないんです！だからっ！」

「……………あ。」

ごめんなさいが重なり、顔を見合わせる僕と山田先生。その次の瞬間。

「ふ、ふふっ！あはははっ！」

二人とも思わず吹き出してしまったのだった。

「あはははっ！す、すみません山田先生。」

「い、いいえこちらこそ。」

そんなふうに笑い合っていた僕たちだったが、

ドカアアアアアアアアアアッ！！！！

「！！？」

突然僕達の目の前の校庭に爆音と土煙が上がる。土煙が収まり、辺りが見渡せるようになると、そこにいたのは蟹と蝙蝠を合わせたような異形の全身装甲フルスキンのISだった。

「何……アレ……！？」

「フ、全身装甲フルスキン！？一体誰が！？」

僕たちが驚いていると謎の全身装甲フルスキンのISは頭をゆっくり上げ僕を見つめながら言う。

「『貴様が織斑良太郎、そして腕にあるのが……DENIOか。』」

『

「あなたは一体!？」

山田先生の問いに謎のISは余裕綽々といったように返す。

「『俺の名はイマジンAI・クラフトバット。……織斑良太郎、
貴様を殺しに来た。』」

「「!？」」

いきなりの殺伐とした言葉に驚きを隠せない僕達。

「な、何で……!？」

「『貴様の持つDENIOは我々の目的の為の鍵なので……。』

『

「鍵……!？」

「『さて、そろそろ死んで貰おうか!』」

ギユアツ!!!

「!?!山田先生!」

「え!?!きゃあっ!?!」

そう言つてクラフトバットは両手に装備された蟹の爪のようなクローから斬撃を飛ばしてきた。僕は山田先生を横に飛ばしながら、反

対の方へ避ける。間一髪、さっきまで居た場所がズタズタにされたのを見て、僕は戦慄を覚えた。

「『よく避けた、と言いたいが……次は無い!』」

そう言ってクラフトバットは更に腕を振りかざす。しかし、

「!・・・へ、変身!」

ギヤリリリリッ!!!!!

「『何!』」

とっさの判断で僕は音声コードでデンオウを展開し、シールドで攻撃を防ぐ。

「『面白い……!それがDENOOか……!』」

クラフトバットはそう言つと更に追撃をかけようとするが、

『うりゃあっ!!!!!!』

「『何!?!うおっ!?!』」

突然飛んできたベンチと石にクラフトバットが下敷きになる。声のした方を振り返ると、

「良太郎!無事か!?!」

「い、一夏兄さん!モモタロス!?!」

そこにいたのは一夏兄さんとモモタロスだった。そのままモモタロスは大声で叫んだ。

『出やがったなあ！このコウモリだか蟹だかわかんねえ野郎！オイ良太郎！俺を呼べ！』

「え！」

『いいから行くぞ！うおりゃあつ！』

「っ！……！！」

モモタロスが走りながら僕の中に入る。……が、

『俺、参上！……っっておわあっ！？な、何しやがる良太郎！？何で俺を呼ばねえんだよ！？』

僕はモモタロスをはじき出した。驚きと怒りを露わにしたモモタロスが問うが、僕はこう言った。

「……僕、一人で戦ってみるよ。……だから、モモタロスの力は……借りない！」

「『ええっ！？』」

「モモタロスの力は……借りない！」

『なっ！こ、このバカ！なに考えてやがる！？』

良太郎の言葉にモモタロスを初め俺たちは驚愕する。

「言った通りだよ。僕はモモタロスとは戦えない。だから一人でやる！」

「なに考えてんだよ良太郎！？」

「そうです！危険ですよ織斑君！」

俺たちは説得をするが、下敷きになっていたクラフトバットが立ち上がった。

「『貴様……！』」

「っ！……え、えい！」

良太郎はそこら辺に落ちていたグランド整備用のトンボを手にしてクラフトバットに突っ込んでいき、そのまま振り下ろすが、

ガアンツ！

「ま、曲がったあ！？うわあっ！？」

「『……何の真似だ？』」

トンボは一撃で折れ曲がってしまい、良太郎は吹っ飛ばされる。

「良太郎っ！」

「『この程度とは……拍子抜けにも程があり過ぎるぞ!』」

「うわぁっ!?!?ぐっ!?!?ぐはぁっ!?!?」

そのまま良太郎は近づいて来たクラフトバットに投げ飛ばされ、一転、二転と地面を転がっていく。

『良太郎!呼べよ俺を!』

「えい!『煩わしい!』うわぁっ!」

モモタロスは呼びかけ続けるが、良太郎は無視してそのままクラフトバットにタツクルをかける。しかし簡単に受け止められてまた投げられてしまう。

「良太郎!」

「良太郎君!」

「うわぁっ!」

と、ここで幾度となく地面へと叩き付けられる良太郎に我慢出来なくなっていたモモタロスは遂にこう言ったのだった。

『良太郎おっ!……うう……うう……!!あぁもう分かったぁ!もう勝手にお前や、トーヘンボウズや眼鏡女みたいな他人に迷惑をかける事なんか二度としねえ!だから俺を呼べよ!良太郎おっ!……!』

「っ！」

ドシヤアッ！

モモタロスがそう言うのと同時に再び良太郎は地面へと叩きつけられる。一瞬の間、良太郎が言った。

「……なさいは？」

『……へ？』

「山田、先生に、ごめんな、さいは!？」

ポカーンと、その場にいた全員が言葉を失った。そ、その一言の為にここまで無茶を!？我が弟ながらにしてもとんでもない頑固さにモモタロスは身体をプルプルと震わせたが、やがて意を決したのか、叫んだ。

『っ!……くう……!! オイ眼鏡女!』

「は、はい!？」

『こんな事は一度しか言わねえからな……!!……っ、っおめんなさああああああああああい!!!!』

その瞬間、モモタロスが赤い光となってデンオウに吸い込まれていき、良太郎はゆっくりと立ち上がる。

「『今更何だというのだ!はあっ』おらあっ!』がはあっ!?!』」

ゆっくりと立ち上がっていく良太郎にクラフトバットは襲いかかるが、逆に蹴られて吹っ飛ばされる。そして立ち上がった良太郎からモモタロスの声が響いた。

『へっ！良太郎、おまえなかなか根性あるじゃねえか。気に入ったぜ！』

「あはは……じゃあモモタロス……行くよ！」

『よっしゃあ！行くぜっ！良太郎！』

そのモモタロスの言葉と共に、良太郎がベルトの赤いボタンを押すと電車の発着音のような電子音が響き渡っていき、良太郎とモモタロスの二人はあの言葉を言いながら共にパスを真ん中にかざしたのだ。

「『変身っ！』」

【s w o r d | f o r m】

電子音と共に周りに線路が現れ、電車が走り回る。その電車がデントウの各部に合体していき、デントウの装甲へと変わっていく。そして最後に頭の桃型のパーツが開くと同時に良太郎の髪が逆立ち、周りに風が広がる。そうしてM良太郎は顔に親指を差し、大きく腕を広げながら叫んだ。

「へっ！俺……！参上お……！！」

「『貴様……！俺と同じイメージンAIがなぜ織斑良太郎の味方をする！？』」

見栄を切り、お決まりの口上を言うM良太郎にクラフトバットは驚きをもつて言う。

「うるせえよ！お前と仲間になつた覚えなんてこれっぽっちもねえんだよ！……いいか？言つとくが俺は最初から最後まで徹底的にクライマックスなんだよ！痛い目見てもしらねえぞお！行くぜ行くぜ行くぜえ！」

そう言つてモモタロスは腰の武器・デンガツシャーを組み立て振り回しながらブーストをかけ、一気に近づいて行く。

「おらあつー！」

ガキインツ！キインツツ！

「ぐつー！」

ガンガンと荒々しいM良太郎の剣戟をクラフトバットは腕のクローで受け止め、払い除けてから空へ逃げて体制を整えようとするが、

「蟹が飛ぶな！」

「ぐはあつー？！」

空を飛ぶクラフトバットに、展開した足の装甲から飛び出した爆弾・モンキーボムをM良太郎が蹴り、クラフトバットへと直撃させる。

（（確かにごもつとも！？でも一応ISだよ！？））

「ぐ、ぐう……！！貴様……！！」

「へっ！トドメと……っ！？待ってモモタロス！」良太郎！？ど
うした！」

地面に落ち、のたうち回るクラフトバットにそのままトドメを刺そ
うとパスを取り出すM良太郎だったが、良太郎の声に止まる。

『あ、あれ……クラフトバットの中に、女の子がいる！』

「……なっ！！？」

良太郎の言葉に俺たちは耳を疑うが、僅かに欠けた全身装甲フルスキのフェ
イスパーツの隙間から、女の子の顔が覗いていた。

『た、助けないと……！！』

「んなこと言ったってどうすりゃ……『隙を見せたな！』何！
？おわあっ！？」

その時一瞬の隙をつき、クラフトバットはM良太郎を捕まえて飛ん
で行き、海へと飛び込んだ。

「良太郎！くそっ！白式！通信を！」

姿を見ることが出来なくなったため、通信を繋ぐと姿は見えないが、
音声は聞こえてきた。

『「ガガッ！」モ、モモタロス、大……丈夫……！？』

「良太郎！？モモタロス聞こえるか！？」

『ガボツ！？ヤ、ヤベエ！？俺泳げねえ！？』

「「ええっ！？」」

二人の無事を知って胸をなで下ろしたのもつかの間、続けてきたピ
ンチに全員で驚愕する。

『早く……！脱出しないと……』『ガキッ！』『うわあっ！
？』

なんとか脱出しようとする良太郎をクラフトバットが水中で良太郎
をいたぶる。

「良太郎っ！くそっ！」

「織斑君！？何処へ！？」

いてもたってもいられなくなってきた俺は白式を展開し、助けに行
こうとするが、山田先生に止められてしまう。

「助けに行くんです！早くしないと良太郎が！」

「無茶です！ISは理論上は水中でも大丈夫ですけど何の訓練もし
てない織斑君が行くのは危険過ぎます！」

「無茶でもいくしか！」「ガンッ！」って痛っ！？誰だよ！って……
・千冬姉！？」

「落ち着け織斑兄。コイツがいる。」

そう言つて今すぐ展開しようとして手を掲げていると、頭に振り返るとそこに居たのは千冬姉と……！

『……そういう事。だから下がつてなよ、唐変木君？』

そう、そこには……！

ズカッ！ガッ！

一方的に水中で叩かれる中、僕はこのままやられちゃうのかなと思つてみると、いきなり声が響く。

『良太郎。』

(じ、この声……？)

『ウ、ウラタロス？』

そう、ウラタロスの声だった。

『何やってるのさ？こんな涼しそうな所で？』

『え！？な、なに言ってるの？そ、そんな事聞いている場合じゃないんだけど……！』

『先輩ものびちゃって……大丈夫?』

『いやだから、大丈夫じゃないって……!?!?』

ウラタロスの場違いな発言に驚いているとウラタロスはこう告げる。

『大丈夫じゃないなら、ボタンを押せばいいんじゃない?』

『……え?』

『死なれたら僕も困るし、早くしなよ?』

(ボ、ボタン?)

僕の指がベルトの僕の所に届くと、僕はウラタロスの指示通り、さつき押したのとは違う二番目のボタンを押してみた。すると軽快な電子音が鳴り響き、パスをかざすと……

【Brof_dor】

……

ザパアッ!

「「っ!」」

「『……ふっ!痛い目を見たのはデンオウ……貴様の方だっ
つたな。』」

良太郎君と海へ入っていたクラフトバットが再びグラウンドへと現れ、こちらに気付く。

「『さて、我々の存在に気付かれた以上、生かすわけにはいかん。死んで貰おう。』」

そう言って手を振りかざそうとした瞬間だった。

ザパアッ！

「「!?!?」」

何者かが海から飛び出し、私達の前へと現れた。

「『何?!?!?き、貴様何故?!?!?』」

「デンオウの……姿が!?!?」

「また変わった!?!?」

そこにいたのは先ほどまでの赤い武将のような装甲とは違って変わった青を基調とした亀の甲羅のような装甲を身に付け、逆三角形のオレンジクリアのバイザーの奥に青い目を輝かせた良太郎君だった。

「『お前……僕に釣られてみる?』」

「『くっ!?!?』」

「逃げんなっ!?!?」

ウラタロスの声で喋る良太郎君はそう言って素早い動きでクラフトバットに追いつき、その身体を捕まえる。そして後ろの二つのパーツを合体させ、レドームのようにすると、レドームを回転させる。そうすると、クラフトバットは突然苦しみだす。

「『がつ!?!き、貴様あ……!何を・何をした!?!』」

「女の子を人質にするなんて、ゲスのやる事だからね。お仕置きさ。」

「な、何が起こってんだよ!?!」

苦しんでいるクラフトバットは何故か自らの意志ではないように身体を装甲を展開し、女の子を排出していく。U良太郎君はそれを優しく受け止め、その場から離れていく。

「も、もしかして……!ウラタロスは制御系へハッキングを!?!」

「え!?!」

「そう、ウラタロスの背部にある超高速電子戦用レドーム、【イスルギ】はもののコンマ一秒でA国防省のファイヤーウォールを突破できるそうだ。」

「『ええええええええええええええ!?!』」

私は推測でウラタロスは電子戦が得意なのではないかと述べると、織斑先生から肯定の、いやそれ以上の言葉を聞き、織斑君と一緒に

驚愕する。そして織斑先生はデンオウの説明をし始めた。

「デンオウのワン・オフ・アビリティー、【フォームチェンジ装甲変化】は相手の戦闘スタイルや状況に合わせ、戦闘スタイルや装備を変える事が出来る。AIによる制御もそのためだそうだ。つまりは……一機で何機もの性能を持つ機体、という事だ。」

「フォームチェンジ装甲、変化……！」

「マジかよ……！」

「そう、これがウラタロスから聞き出したデンオウの真の力だ。」

織斑先生はそう答え、私は再び良太郎君の姿を見るのだった。

「さあ、行くよ？」

ジャギッ！

『ぐはあっ……！』

デンガツシヤーを一繋ぎに連結し、ロッドモードにしたし良太郎は、動きのぎこちなくなつたクラフトバットへとロッドを払って攻撃し、倒れた相手へ槍をつくように攻め立てる。

『ぐはあっ！き、貴様あ！卑怯だぞ！？』

「卑怯だって？よく言われるよ。それっ！」

「があっ!?!」

そしてそのまま二撃、三撃と攻撃を喰らわしていき、クラフトバットはゴロゴロと転がっていく。

「そろそろ三枚に下ろすかな?」

そう言っつて、良太郎はパスを取り出し、ベルトへとかざす。

【full charge】

電子音が鳴り響き、エネルギーがバチバチとデンガツシャーに溜まっていく。そしてそれを、良太郎はクラフトバットへと投擲する。

「はあっ!」

『ぐあっ!?!う、動けん!?!』

投げたデンガツシャーを受けたクラフトバットは甲羅状のエネルギーネットに捕まり、動きを封じられる。良太郎はその間に分離させた後ろのレドームと共に空へ飛び上がり、そのまま急降下からのキックを放った。

「ぜりやああああっ!」

『ぐはああああああああああああああああっ!?!?!?!』

キックが命中し、吹っ飛ばされるクラフトバットだったが、蟹のよくな機体の半身は爆発したものの、コウモリのような半身は直前に

分離し、小さな身体を作ると逃げようとしていた。

『くっ！覚えてい……がっ！？』

「逃がさないよ？……さて、もう一枚下ろすと……」
「ちよつと待ったあ！』！？」

U良太郎は後ろに背負ったレドームからレーザーを放ちクラフトバツトを足止めしてトドメを刺そうとすると、声が響き身体の動きが止まる。

『お前だけにいいカツコさせっか！亀！さっさと俺に替われ！』

「ちよ、ちよつと先輩！？無茶しないで！』いいから早くか・われ！』ってああ……押しちゃったよ……。」

【sword | form】

赤いボタンを押し、パスをかざすと再び装甲が変わり、ソードフォームとなったM良太郎はデンガツシャーを組み替えソードモードにすると、パスをベルトにかざす。

「行くぜえ！この前とは一味違う、必殺！俺の必殺技！パート？！」
ソードの刀身にエネルギーが溜まっていき、輝きが最大になると刀身が外れ、エネルギーで持ち手と繋がれた刀身は宙へと浮かび上がる。

「取れた！？」

『なっ！』

驚きもつかの間、M良太郎はそれを逃げよつとするクラフトバット
へそのまま横に一閃、

「うおりあっ！」

『がはっ！？』

もう一度横に一閃、

「おらあっ！」

『じはあっ！？』

最後に縦に振りかざしたのだった。

「どつだあっ！」

『ぐわああああああっ！』

チュドオオオオオオオンッ！

「・・・くうく！サイッコー！」

爆発を背に、M良太郎はそう満足そうに叫びながら変身を解除した。
元に戻った良太郎は膝からガクツと倒れ、うなだれながら言ったの
だった。

「っ、疲れた・・・ふぎゆう。」

バタツ。

・・・・・・・・・・・・・・・・

クラフトバットを倒した後、僕と一夏兄さん、それにモモタロス達
はあの場にいた織斑先生にこの件を秘密にするようにと言われた。
ちなみに女の子は無事のように、学園に協力している病院へと運ば
れたようだった。倒された機体は学園の地下に運ばれ、調査をして
いるらしい・・・・。で、

『織斑君、良太郎君クラス代表と副代表就任おめでと〜!』

「おめでと〜!」

「あ、ありがとう・・・・。」

今僕らは食堂の一角で僕と兄さんのクラス代表と副代表就任パーテ
ィーの中にいた。大勢のクラスメイトの女の子に囲まれ、質問の嵐
の中にありながら僕はクラフトバットが言ったことを思い出してい
た。

(それにしても・・・・鍵、ってなんなんだろう?クラフトバット・
・・・・イマジンAIの目的って一体・・・・?)

そんなことを考えていると、横から大きな溜め息がつかれる。隣に

いる一夏兄さんからだ。

「に、兄さんどうしたの？」

「ああ、いやな。クラス代表って言われても何をどうすりゃいいんだろうなあって……俺は只の素人なんだぜ？」

「ま、まあまあ一夏兄さん。元気だして！僕も頑張るからさ。」

「はいはい、新聞部です！話題の新生、織斑一夏君と織斑良太郎君に特別インタビューに来ました！」

「へ？」

と、一夏兄さんを励ましていると眼鏡をかけた女の人がやってきた。リボンの色からして……二年生の先輩、かな？

「私は二年の黛薫子。新聞部副部長よ、よろしくね。はいこれ名刺。」

そう言っただけ名刺を渡したのもつかの間、黛先輩は一夏兄さんへポイスレコーダーとカメラを向けながらインタビューを開始する。

「では早速織斑くん！クラス代表になった感想は！？」

「えーと、まあ……、何というか、頑張ります。」

「うーん……もっといいコメント欲しかったな。俺、IS学園に登場！とか。」

（（（微妙にパクリだ！？）））

モモタロスの口上に似たセリフに僕らがシンクロしてつつこんでいると、先輩は今度は僕に聞いてくる。

「じゃあ適当に捏造しておくとして良太郎君、同じ男子クラスメイ
トまたは弟として一言！」

「へっ！？ぼ、僕！？」

いきなりのフリに慌てふためく僕。しかしなんとか答えようと、必死に頭を捻って考える。

「え、えつと・・・！一夏兄さんは優しい人だから、兄さんをよろしくお願いします、みたいな感じで・・・。」

「む。じゃあ、お兄さんはいつでも誰でも告白を受けますよ！、
にしておこう。」

「え！？ちょ、ちよつと！？」

いきなりの爆弾発言に、篤さんやセシリアさん、そして周りの女の子達から猛烈な視線が突き刺さり慌てふためく僕ら。そんな僕らを
篤先輩は笑いとばしながら言う。

「あははは！冗談だって。そんなに驚かなくてもいいじゃない。そ
んじゃ、セシリアちゃんもコメントちょうだい。」

「あ、あまりこういったのは得意ではないのですが・・・仕方な
いですね。コホン、では何故今回私がクラス代表を辞退したかと

いうと・・・』うん、長くなりそうだからカット。こちらで捏造しておくから。』さ、最後までお聞きなさい!」

さつきから捏造の嵐なんだけどいいのだろうか?そんな疑問も寄せ付けず、その後も猪突猛進に黛先輩は突き進んで行った。

「じゃあ最後に専用機持ちで写真撮っちゃおう。セシリアちゃんと一緒に夏君と良太郎君、そこに並んでくれる?ああついでにそこにいる赤い人と青い人も入っちゃって。」

『ああ?なんだ?』

『写真かあ。格好良く撮してね?まあ、僕が格好良いのは変わらないけどね。生まれつきだから。』

黛先輩に言われて僕ら三人と、みんなから貰ったプリンを食べていたモモタロスとウラタロスが並び始める。

「じゃあ撮るよ」。35×51÷24は?」

「え?えつと...2?」

『2い〜!』

「え・・・70ぐらい?」

「ブー、74・375でしたー。良太郎君は惜しかったねー。」

「『いやそれないだろ!』」

・・・パシャッ！

反論を無視してシャッターは切られたのだが、何故か・・・

「・・・何故全員入っていますの〜!？」

セシリアさんの言葉のように、いつの間にかクラスの女の子達全員が入っていたのだった。

「いいじゃんいいじゃん〜」

「セシリアだけ抜け駆けはないでしょ〜」

「クラスの思い出としてさ〜」

「そつだ、お前一人だけはズルすぎる!」

篝さんまで・・・ああ!また色々と喧嘩が!モ、モモタロスも煽ったりしないで!

「まあまあいいじゃんりょーりょ〜」

「の、のほほんさん?」

「ごつごつお祝いは〜みんなで楽しまないと〜」

そう言っつてのほほんさんはある方向を指差す。そちらを向くと・・・

『あっ!テメエ俺のプリンとつたるトーヘンボウズ!』

『はあ！？何でだよ！これは俺の分だ！』

『うるせえ！お前の物は俺の物、俺の物は俺のもんなんだよ！』

『何でジャイアニズム！？』

「……………」

喧嘩している兄さんとモモタロスだった。こ、これは楽しんでるのかなあ？

(いざこざが増してる感があるけど……………まあでも確かに……………こんな日が、ずっと続くのも。)

「……………悪く……………ないかも、ね。」

そう小声で呟きながら、僕は手にしたコップのオレンジジュースを飲むのであった。

……………

数刻前……………IS学園正面ゲート

「IS学園……………ふうん、ここがそうなんだ……………」

人気のない学園の正面ゲート前に、一人の少女が佇んでいた。長めで少し茶色の入った黒髪を高い位置でツインテールにして纏め、黄

色のリボンで縛った少女がそう呟くと、彼女の横に金色の姿をした異形の者が現れ言う。

『せやな鈴。とうとうここまで来たんや。鈴の想つとる奴も鈴の事を待つとるハズやで。』

「そうねキンちゃん！……さあ、待ってなさいよ……一夏！ついでに良太郎！」

織斑良太郎を巻き込む運命の大嵐は、更に激しさを増そうとしていた。

第六話「サギ師と敵襲?! 後編」(後書き)

次回! I S・D E N I O 《インフィニット・ストラトス・デンオ
ウ》!

「その情報、古いよ!」

「お前……鈴か!？」

「」」「どづいご事だ)ですの(?!?一夏(さん)!!」「」

『……イマジンの匂いだ!』

「ちょ、ちょっと鈴さん待ってってうわああああつ!？」

「アンタの不幸も相変わらずね、良太郎。」

『俺と鈴の強さは……泣けるでえ!』

次回! 「ツインターズ・ボンバー」 青空そらを駆けて俺、参上!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0906s/>

IS・DEN-O《インフィニット・ストラトス・デンオウ》

2011年7月12日22時42分発行